
Sing With Songs

中川 健司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S i n g W i t h S o n g s

【Nコード】

N 1 4 3 5 H

【作者名】

中川 健司

【あらすじ】

才能がないといわれ、バンドも解散し、夢に敗れ途方に暮れていた一人のロックシンガー、音無孝介はある日交通事故に遭ってしまった。目が覚めた病院先で、これから先のことを考えているそのとき、声が聞こえた。「中々面白い曲だね」病院で出会った、類い希な音楽の才能を生まれ持ちながらも、重病を患っている一人の少年、奏。
「お兄ちゃん、お兄ちゃんに僕の音楽を全部あげる」……これはある一人のロックシンガーと、音楽の才能を持って生まれた一人の少年の奇跡の秘話である

第0話（前書き）

新連載ですっ！（b^ー。）

この話は、自分が今まで培ってきた文章力を生かしていく作品にしたいと思います

なので丁寧に描写していくので、更新は時間かかるかも……

グッラブ！の方も読んでくださいっ！

「本作のあらすじ」

才能がないといわれ、バンドも解散し、夢に敗れ途方に暮れていた一人のロックシンガー、音無孝介^{おとなしこうすけ}はある日交通事故に遭ってしまう。

目が覚めた病院先で、これから先のことを考えているそのとき、声が聞こえた。

「中々面白い曲だね」

病院で出会った、類い希ならぬ音楽の才能を生まれ持ちながらも、重病を患っている一人の少年、奏^{かなで}。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんに僕の音楽を全部あげる」

……これはある一人のロックシンガーと、音楽の才能を持って生まれ一人の少年の奇跡の秘話である

この作品は大人の男性視点のため多少性的に関する表現が御座いますが、R - 15 指定にするほどの直接的な表現は御座いません。少しでも不快に思われる方へ予め御了承お願いします。

第0話

「音楽はね僕らと同じ、生きてるんだよ」

誰かがそう言った

意味を捉えることが出来なかった俺はすぐに聞き返した

「生きてる……っっていう表現はおかしくないか？」

例えば躍動感のある歌だ、とか、情景が見えてくる曲だ、とか。

比喩的な表現であれば、幾らでもそういう表現で言い表すことは出来る

それは音楽に限ったものではない

しかし今俺の目の前にいるこいつは、頭を使って比喩的な表現で見出そうとはしていない

「音楽は生きている」と言っている

例えば、俺たちのように会話をしている。呼吸運動を行って息を吸ったり吐いたりしている。またや多様な感情を持ち合わせている

勿論、音楽は言葉なんか発しない。呼吸をして息を吸ったり吐いたりしない。喜んだり、悲しんだり、怒ったりはしない

それでもこいつは言う

「音楽は生きている」、と。

「ううん、音楽は生きてる。僕たちのように話をすることも出来るし、呼吸だってする。色んな感情を表現したり、リズムに乗って踊ったりだって出来る」

もちろんそれは

「“音”で全て表すんだけどね」

そう話すそいつの目は輝いていた。話すことを楽しんでいるように思えた

生き生きと話すそいつの姿は、まるで「音楽」の気持ちを代弁して話しているようだった

「歌を歌ってるだけじゃ、お兄ちゃんはいつまでもダメなままだよ」

「ふん……じゃあ何か？音楽の気持ちになって歌えとでも言うのかよ」

俺は嘲笑ってそう言ったつもりだった。けどこいつは子どもらしい笑顔を満面に見せて言ってきた

「そうさ。“歌を”歌うんじゃないよ。“歌とっしよに”歌うんだっ！」

あいつにそういわれてから、随分月日が経っていた。俺は素っ気ない柄のフローリングで覆われた小さな楽屋の中、一人片手に煙草を持ち、煙をふかしていた

五年とはあつという間だ、俺にしてみれば……

こう煙草をふかして、一人になる時間を持つと……不思議にもこれまでの長い人生を振り返る

そしてその中で取り分け思い出すが、たった今も思い出していた、そいつの言葉だった

その会話の部分が、その一瞬が、まるで走馬灯のように瞬間的に脳裏に浮かぶ

脳内でその記憶という噴水が瞬間的に湧き出すみたいに

そのことについて、俺は皮肉なことだと感じていた

結局五年経って、一流のシンガーとして名を馳せた今でも……俺はあいつに説教を食らっているわけだ。もちろん、それは俺の過去の記憶の中で

いや、今だからこそなのかもしれない

今だからこそ、俺はあいつのことを思い出すべきなのだ

初心に振り返るとはよく言ったものだ

湧き起こる感情が物事を感慨深く思考をさせてしまう

俺は考えるのも嫌になって、思考を止めるかのように煙草の火を消して吸い殻を灰皿に捨てた

そして傍らに置いてある楽譜ノートを手にとった。俺が一流のシンガーを目指していたときからずっと愛用し続けていた楽譜ノート

すでに年季がいつていて、表紙の部分は幾らか色褪せている

俺の音楽がいつぱい詰まっている楽譜ノート

例え使い切ったとしても到底捨てる気にはなれないだろう

表紙を開いて、パラパラとページを捲った。今日披露する新曲がノートに刻まれている。ギター&ボーカルとして最終チェックを……

そのときにノートからひらりと紙のようなものが落ちた。俺は落ちたそれをすぐに拾う

手に取って見る。それは写真で、そこに写っているのは紛れもない俺自身。愛想のない顔でいかにも面倒くさそうに写っているように見えるのだが、実はこのときの俺は非常に照れくさく、わざと無愛

想な表情を作って照れ隠しをしているのだ

そしてその写真と一緒に写っている、小生意気な印象しかない子供がいる

当時十歳かそこらの子供が、まだ幼げ残る子供らしい笑顔で満面に笑っている

写真を見つめていると、いつの間にか口元でにやけている自分に気がついた

そして写真を見つめながら、再びあのときの場面が脳裏に浮かんだ

「歌といっしょに”歌う？悪いけど、意味が全然分らない」

そんなの二十を過ぎた大人の俺から言わせてみれば、せいぜい小学校の低学年まで言い使えるような、慣用的な表現だった

さっぱり理解出来ない

歌といっしょに歌うことなんか出来るはずがないだろう

「お兄ちゃんはおもつと柔軟な頭を持つべきだよ」

「柔軟だろうが堅かろうが、子供の言うことは理解し難いね」

俺はまた所詮子供の言う戯言だと思い込み、大人気なく嘲笑した
大人気なくなるのも仕方がない。目の前にいるこの「ガキンチョ」
は憎たらしくなるほど小生意気なのだ

「ガキンチョ」は呆れるようにため息を出した

「ほらまた……お兄ちゃんは何でも否定から入る。よくないよそれ。
大人になるとみんなそうなるの？」

大人になるとみんなそうなるのかどうかは知らない。断言出来るほ
ど、俺はそこまで人生を長く歩んでいない

「かもな」

俺は結局そういう曖昧な答えを返した。そいつは「ふうん」と言
つてから、再びあの子供らしい笑顔を見せた

「でも分かんないかなア？つまりさアー、あー……えっと……」

そいつは頭の中で言葉を唱しながら、言いたいことをまとめた

「えー……つまりね？“Sing song.”じゃダメなんだよ」

俺はそれを聞いたとき、少し驚いたように口をポカンと開けた。そ
れからすぐに可笑しな発言をするものだなと小さく笑った

「小学生のくせに英語が出来るのか」

「今の小学生は英語もちゃんと勉強するんだよ。お兄ちゃん知らな

「かった？」

「知らなかったな。けれどそれはただ英語に纏めただけだ。上手く言い換えられてはいない。それに文の構成も間違っている。“歌を歌え”と言いたいなら、“song”に冠詞をつけるか、複数形にしなければダメだ」

そこところは随分子供っぽいところがあるのだなと、俺は可笑しくなって声を立てて笑った

そいつは的を射られたのが恥ずかしかったのか、赤面していた

「うるさいなあ……まだ勉強中なんだもん……“カンシ”とかそんなの分かんないよ。お兄ちゃんは大人気ない」

「かもな。で、結局何が言いたいわけ？」

俺が再び聞いてみると、そいつはまたしばらく考えてから、俺に言ってきた

「だから……“Sing with songs”ってことオッ！」

途端に部屋のドアが開いた。俺は途端な出来事に驚き、目線を写真からドアの方へと向けた。外から入ってきたのは、大学時代から付き合いのある、俺たちのバンドのメンバーの一人、カズが入ってきた。カズはメンバーの中で一番仲の良い存在だった

「孝介^{いっけい}。そろそろ時間だよ」

カズの言葉を受け、俺はゆっくりと頷いた

「ああ」

俺が頷くと、カズは部屋に入ってきて、顔を覗かすように言ってきた

「何見てんだ？」

カズにそう聞かれて、俺は写真を見つめながら小さく笑った

「別に……ただ懐かしさにふけてるだけ」

カズは俺の言葉を受けると、その写真に目をやった。そこに写った少年を見ると不思議そうに俺に尋ねた

「この子……確かお前があんとき言ってた子だよな」

「ああ」

カズは突然物珍しそうに俺を見始め、急に茶化すようににやけてきた。カズは笑うと、何故か急に豊頬な美少年の顔へと変化する。そ

れは大学時代から変わらなかった

「へえ……お前が物を振り返ることがあるなんてな」

確かに周りからそういわれることが度々あるのかもしれない。俺にはどうも、過去は決して振り返らず、そして未来の先も見つめることはなく、ただ目の前の現状をこなしていく。悪く言えば地味なところ、良く言えば現実主義なところがあるらしい

確かに過去なんか振り返っても、またや未来の先を見据えても、あるのは目の前の現状だけ。そう言ったものはするだけ無駄、という考えがあるのだから、まったく嫌になる

俺は小さくため息を吐き出すと、写真を再び楽譜ノートに挟み、パタンとそれを閉じた

「たまには俺だってそういうことするさ。さあ、行こう」

俺は大きなギターケースを持ち、カズとともに楽屋を出た。ステージまでの廊下を歩きながら、カズが訊いてきた

「孝介はその子にすごく感謝してるんだろうな」

まるで客観的な物の言い方に、孝介は首を傾げて小さく笑ってしまった。言っていることは正しかった

革靴の足音が静寂な廊下に響き渡った

「……かもな。あいつと出逢わなかったら、きっと今の俺……いや、俺たちはいなかったろうし、あいつから教わったこともいっぱいあるから。感謝してるのは本当だな」

「……どんな子だったんだ？その子」

カズに聞かれて、俺は歩きながらしばらく考えた。どんな子……か……

こんなときどう言えば良いのだろうか……似合った表現が見つからなかった

あいつは、音楽の神童と呼ばれても不思議じゃなかった

不思議じゃなかったのだが、あいつは言っていた

自分は天才でも何でもない。モーツァルトやベートーベンのような神童でもない

ただ自分は音楽が好きなだけ

色んな音を感じることに喜びを感じるだけ

音を奏でたり、歌ったりするのが好きなだけ

“音”を“楽”しむことが好きなだけ

「小生意気なガキンチョだったな」

考えた末に、俺はそう答えることにした。この表現があいつに対するイメージが何よりも強かったのだから。カズは「ふう〜ん」と言う、それ以上は何も聞いて来なかった

廊下を歩いていると、とあるドアの前まで来た

ドアを開けた瞬時、今まで静寂だった俺の空間は破られ、代わりに歓声や叫び声が入り混じった音の空間へと形を変えた

ステージ裏に入れば、当然なのだ

そのステージ裏には同じメンバーの、亮太りょうたと弘樹ひろき、そしてプロデューサーかいぬまの貝沼かいぬまさんが待機していた

そうだ。一応これが俺たち“KANADE Boys”（カナデボーイズ）のメンバーである

カズはドラム、亮太はベース、弘樹はギター、そして俺はギター&ボーカルである

貝沼かいぬま吾郎ごろうさんは俺らカナデボーイズの専属プロデューサーである

この道二十年のキャリア豊富な中年男で、細身で今年で四十歳なるわりには白髪混じりの髪。愛嬌のある笑顔にはメンバー全員から愛されている

「孝介、遅かったな。セットは用意出来てるぞ」

亮太にそういわれながら、俺はエレキギターを出してチューニングを行った

今日も良い音色を出してくれよ

そんな念をかけていると、プロデューサーの貝沼さんがメンバーを全員集合させた

メンバーに話をする際に軽く咳払いしてから話すのは、貝沼さんの癖みたいなものだった

「えーカナデボーイズのみなさん。今日のライブには何と二万人の方たちが来てくださっています。彼らに報いるためにも、今日は最高の演出を披露しようじゃありませんかっ！」

二万人とは……また大勢集まってくれたものだ。さすがに緊張の色は隠せない

貝沼さんは始まる直前に、いつもメンバーたちの士気を高めてくれるような言い方をする

「えーこのライブが無事成功すればですね、また次々とテレビ出演のオファーが来てくれることと思います。少し忙しくなりますが、みなさん誠意を持って頑張りましょいっ！」

最後の可笑しい方にメンバー全員がどつと笑いを起こした。貝沼さんはこのように笑いをとって、緊張を解してくれる

貝沼さんが腕時計を見た

「時間ですっ！」

その言葉を聞いて、俺は深く息を吸った。このときに脈打つ心臓の音を聞き入る

トクン トクン トクン

「……よしっ！行くぞっ！」

俺はメンバー全員にかけ声をかけて、メンバーは大きな声で声をあげた

そして4人揃って、ついに……二万人の客の前でステージへと立った
鳴り止むことのない歓声を浴びながら、俺は眩しそうにスポットライトを見上げた

物凄い人の数に圧倒されないよう、そして緊張せずに……

何故かこの瞬間が……本当に心地よかったりする

メンバーが各々配置についたことを確認すると、俺はドラムのカズに目で合図を送る。カズだけではなく、亮太、弘樹とも目で会話を
する

——行くぞっ！

カズがスティックでリズムをとる

…… 1、2、3っ！

孝介は何も最初から、今のようにな万人の客の前で歌えるような大きな舞台に立てたわけではない

もちろんそれまでに、幾つもの挫折を経験し、失敗を繰り返してきた
そんな彼を救ってくれた、そして音楽の本当の意味をおしえてくれた一人の少年がいた

出来事は今から遡ること、五年前

これは、一度夢に敗れた一人のロックシンガーと類似希ならぬ才能を生まれ持った一人の少年の…… 奇跡の秘話である

S
o
n
g
s

W
i
t
h

S
i
n
g

第0話（後書き）

第0話はプロローグという形にしたのですが、どうだったでしょうか？

何か表現がおかしいところがあったら、いつでもお申し付けください

評価 感想を待ってます（・・・）

第1話

やってられない……

人混みが流れていく。色とりどりの光で覆われている夜の東京を、俺は歩きながらそう呟いた

右肩にはギターケースを背負って、左手には楽譜やらチューナーやら音楽関係の道具の入った鞆を持っている

どちらも大した重さではない

ギターケースに入っているのは、アコースティックギターだ。俗に言う、アコギだ

エレキギターなどとは違って、中には空洞がある。その空洞がアコギには必要不可欠なのだ

中の空洞が無ければ音は曖昧なものになり、響くことはない

またボディが大きいというのも音を響かせる理由の一つだ

物理的法則から成り立つ音の反響……

高校のとき物理が好きだった俺はこの法則に惹かれた

音が反響することによって、その周波数を大きくする

結果普通の音よりも数倍大きく聞こえることができる

このような楽器にも物理学が関わっていることに俺は大いに感動したが……俺はアコースティックギターに対して惹かれた部分はそう言った学問的なところではない

音色である

弦の一本一本が奏でる、この音色が好きなのだ

高校に入学したと同時に、初めて親に買って貰った中古ながら三万近くしたアコースティックギター……家の近くの古楽器屋で購入した

昔から音楽が好きだった俺は夢中になった

時間を忘れて、家で、近くの公園で、学校で……俺はアコースティックギターを持ってひたすら弾いていた

コードなんて全く分からなかった。ストロークも最初は上手く行くはずがなかった

そこらへんの知識は、ギター初心者のための本に頼ることにした

ピックの持ち方すら分からず、左手の指で弦を押さえて鳴らしてみても、気持ちのいい音は出ない

左手の指には豆が出来て、激痛を伴った

自分を戒めてるようで嫌気が差したが、それでもギターを弾くのを止めなかった

毎日ギターを弾いている内に、コードも少しずつ覚えていった

G、G7、D、D7、Dm、A、Am、Am7……

初めてのバレーコードはFだった

こいつにはやはり苦労した

人差し指で1フラット全てを押さえるのが難しくって、かなり苦労したことを覚えている

初めて曲を弾けたときは、嬉しかった

興奮して何度も同じ曲ばかり弾いて、そのメロディーに合わせて口ずさんで歌っていた

……

こうして思い出すと、俺は音楽が本当に好きだったのだ

挫折したときは初心に振り返るといいとは聞くが、感じるのは虚しさだけだった

何が夢だ

何が理想だ

そんなもの、くそくらえだ

心の中でそう呟いてみた

早く家に帰って、やけ酒にありつきたい気分だった。嫌なことなんか全部忘れて、酔っ払って、眠って……

ああ、もういつそのことそのまま永遠に眠ってしまえばいい

この想いを歌にするなら、何と歌おうかと考えた
メロディーに乗せて歌えるなら、どんな歌になるかと考えた

自分で作った歌を心の中で歌ってみた

自分で作ったものだからか、いい歌に聞こえる

ずっと抱いていた夢があった

長年抱き続けていた夢があった

この国を代表する歌手たちのように

みんなに希望をもたせる素晴らしい歌手になりたい

自分の想いを歌にして

人々に夢を与えるような歌手になりたい

言葉で言うだけなら誰でも出来る

実際に叶えるのが難しい

何度も足を運んだ

名のあるレコード会社に、夢と希望を持ち込んだ

俺の目の前にいる、くそむかつく態度を取っている中年親父

偉そうに椅子に座って、足を組み、俺の歌が乗っている楽譜を殆ど
目を通さず一言

本当に一言だけ

「はつきり言ってね……才能ないよ」

「……え？」

そんなこと言われて、俺は戸惑いを隠せなかった。殆ど目を通され

ずに、そんなことを言われたのだからたまったもんじゃない

「この程度の曲なんかじゃね、流行らないの。正直嘗めすぎだね、うん」

どこがどう悪いのか、どうすれば良くなるのか、それすらも言わずにぶっきらぼうに楽譜を俺に突き返してきた

「冷やかしなら帰ってよ。こっちはそういうのに構ってる暇はないの」

どうせ赤の他人だ。俺の音楽性を理解してもらえるはずがない

しかもこんな中年親父になんかに言われると、募るのは喪失感よりも怒りだ

俺は諦めずに、色々なレコード会社に足を運んだ

ストリートで行き交う人々に向けて歌い続けた

メンバーと曲を何度も書き直したりして、激しく口論をして、行き着いた曲を……誰かに認めてもらいたい

ただ誰かに認めてもらいたい

俺の……俺らの音楽をつ！

当人達が諦めない限り……

俺は一度立ち止まって、胸ポケットに入れていたタバコを取り出した。タバコをくわえて、百円ライターで火をつけてから、煙を吐き出した

胸くそ悪い

一バンドのヴォーカルとして三年頑張ってきた

その結果がこれか

くだらない

所詮俺には音楽の才能も、夢を掴み取るための運もなかったのだ

この今俺が吐き出している煙のように、夢とは儚く消えていくものなのだ

人の夢と書いて、儚いと書くのだから

「なあ、色々考えたんだけどさ……」

今日、それは突然だった。バンドを組んでいたメンバー、4人でファミリーストランで夕食を取っているときだ

「俺らさ……解散しね？」

全員が息を呑んだ

いつその話題が出るか、全員が感じ取っていたから

「三年間、必死に頑張ってきたけどさ……もう、終わりにしよう」

俺以外の二人は黙り込んでいた。俺は自分の中で沸々と怒りが込み上げてくるのが分かった

「俺……さ、今更だけど……就活してるんだ」

そいつはそう言って静かに話した

「この間、三流会社だけど面接通った」

そいつは、俺らに黙って金融会社に就職したらしい

「お前らも、今みたいに夢ばっか追いかけて、売れない曲を作って、一生フリーターってわけにもいかないだろ？だから……そろそろ踏ん切りをつけるべきだと思う」

俺は気づけば、そいつを殴り倒そうとしていた

煙草の火を消して、再び歩き出そうとした。と、そのとき鼻の先に
冷たい感触を感じた

空を見上げてみれば、冷たい雨が降り出した

街を歩く人々は、濡れないように手持ちの鞆などで頭の上を隠した

俺は小さくため息を吐いた

今日は降水確率は五十パーセントと天気予報では言っていた

とことん、俺はついていないのだ

走って家に向かっていた。すでに髪や服はびしょびしょに濡れている。思ったよりも強い雨で、お気に入りだったカジュアルなシャツはすっかり濡れてしまった

一番心配なのはギターがびしょびしょになることだ

ハードケースに入れてあるから、そこまで心配はいらないかもしれないが、帰ったらすぐにタオルで拭いてやろうか

だが、もうギターなんて使うことなんかないだろう

しかし本当についていない

家の近くにある信号が赤なので、俺は立ち止まって信号が変わるのを待っていた

この信号を渡ればもうすぐ家だ

数分後、信号の色が変わった

再び走り出して、信号を渡ろうとした

そのときだった

妙に耳五月蠅く鳴り響くクラクションの音が、俺の脳髄を貫いた

貫いたのは騒音ではない。激しい衝撃と痛みだった

いつの間にか俺の目の前が、水平に横になっていた

何だかとても冷たくって、眠たかった

激しい痛みを感じながら、俺は静かに目を閉じた

俺は本当にとっととっとなんてないらしい……

第2話

孝介が次に見たのは、真つ白な天井だった。その光景が見えた瞬時に、激しい痛みが頭の先まで貫いた

体が動かない。手足の指すら動く気がしない。だが、自分の呼吸の音だけはしっかり聞こえる

生きている

孝介は確かにそう思った。ずいぶん長い間、真つ暗だったような気がした。ある意味自分は死んでいたのかもしれない

死んでいたのに、自分はふと生き返ったのだ

この手足の指まで動かないというのは、骨折とかそういうわけではなさそうだった

恐らくまだ硬直が解けていないのだろう

やけに冷静に状況を把握しようとする自分に、孝介は小さくため息をついた

これじゃあ、当分は死を受け入れることはなさそうだ

しかし、ここはどこなのだろうか

そして何故自分はこのような状況になっているのだろうか

それを孝介は分かっていたいなかった

「おとなし
音無さん」

優しい声が聞こえた。孝介はゆっくり声のする方を向いた

白衣を着た若い女性が、孝介の横に立っていた。自分より高い……
ああ、そうか……

孝介はこのとき初めて、ベッドに横たわっているのだと分かった

若い女性……その白衣から分かった。この人はナースなのだ

「目が覚めたんですね？……気分はどうですか？」

俺は酷い頭痛を感じた。身体の痛みはさほど大したことではない。さつきからの激痛はむしろこちらのようだった

「……ああ……」

俺は唸るように声を発した。頭がぼうつとして、口を動かすのにも体力を使うようだった

「……頭が痛い……」

俺がそう言つと、ナースの女性はクスツと小さく笑った

「頭痛は恐らく、長時間眠っていたからだと思います。脳には直接的なダメージは見当たらないと、先生は仰ってましたから」

「……………そうか……………え？」

孝介はようやく目が覚めたようにそのナースを見た

孝介は起き上がろうとしたが、身体を迸る激痛がそれをさせなかった

「……………っ……………」

痛みを感じて、自分の右足に視線を向けた。自分のその右足は包帯が巻かれていた

この硬い感覚は恐らくギブスだろう

右足の膝の関節からしっかりと固定されていて、その足は負担をかけぬよう丁寧に処置を施されていた

孝介はそれを動かそうと試みたが、まったく動く気がなかった。その代わり、激しい痛みが孝介を襲った

——折れている

「あの……………」

孝介の様子を見ていたナースが、気遣うように言ってきた

「あまり無理をしないでください。一応、翌週には退院出来ますが、それまで安静にしてください」

退院……………？

孝介はその言葉だけを捉えた。孝介はゆっくりと辺りを見回してみた。自分は大きなベッドの上に、そして右方には液晶のディスプレイと窓、花瓶……花瓶には綺麗な花が飾っていた

左方は仕切りのためのカーテンがあって見えないが……恐らく隣には孝介が乗っているのと同じように、ベッドが連なっているのだろう

ここは病院なのだと孝介は感づいた

自分は病院にいる。どこの病院だ？恐らく自分のアパートからさほど距離はなかるう。アパートの近くにある病院といえば……内科医院と外科医院が二つずつ、産婦人科が一つあったのを孝介は思い出した

「あの……」

「はい？」

孝介はこのとき自分の声が囁れていることに気づいた

「あの、ここって……」

「ああ。ここは病院ですよ？一盛病院です」

一盛病院。一盛病院の病室に自分はいる。その中のベッドで自分は眠っていた

いや、眠っていたというよりも気を失っていたのだ

記憶の先がないのは、アパートのすぐ目の前の横断歩道を渡ろうとしてからだ

雨が降ってきたから、急いでアパートに帰ろうとしていて、横断歩道を走って渡ったのだ

その後酷く耳五月蠅いクラッシュ音……そこから記憶がない。ああ、冷たい感覚があった……

「音無さん」

ナースの人が自分の名前を呼んだ。ナースの人は孝介の顔を覗き込むようにして見ていた

その美しい顔立ちに、孝介は不謹慎ながら胸をときめかせていた

「もしかして、何も覚えてないんですか？」

「え……あ……」

「ちょっと待ってください」

ナースの人は手に持っていた用紙を取り出し、胸ポケットに入っていたボールペンを手に取った

「これからいくつか簡単な質問をしますので、分かる範囲でいいです。もちろん個人情報なので、こちらでしっかり保護するのでそのところは大丈夫です。では正直に答えてください」

なるほど……記憶障害があるかどうかを確かめようとしているのだ

たがあいにく、記憶が失っているのはあくまで横断歩道のところから先のことだ

彼女も仕事柄、そういうことをしなくてはならないのだろう

仕方ないが、付き合ってやるか

「それでは始めます。御自分の名前と年齢は分かりますか？」

「音無孝介、二十三歳」
おとなしうすけ

ナースの人は用紙に書き綴っていった

「生年月日とお住まいの住所は分かりますか？あ、住所は都区だけでいいです」

「一九八七年六月十日……住所はえつと……東京都江戸川区」

「江戸川区……江戸川区の郵便番号の最初の三桁は分かりますか？」

「132……133……134。俺のところは132ですけど」

「結構です」

ナースの人はまた用紙に何かを書き綴った

それにしても、郵便番号なんか聞いて一体どうなるのだろうか

確かに常識だろうが、それは記憶というよりも知識に類する

——まあ、元々知識自体も記憶の一部なのであるから、あまり深言いはよそう

「……お仕事は何をなさっていますか？」

俺はそれを聞かれて、口を噤んだ。仕事……か……

それを聞いた瞬間、記憶が蘇ってきた。ああ、確か気を失う前……あいつが言ってたな……

夢ばっか追いかけて、一生就職しないわけにもいかない。分かってるよ……分かってる……

「音無さん？」

孝介はナースに声をかけられて、ふと我に返った

「ああ……一応フリーターです。以前は……」

孝介は小さくため息を吐いた

「音楽活動を……してました」

それからナースに幾つか質問をされると、ナースは納得したように頷くと用紙をしまった

「……記憶障害は恐らく出てないみたいです。事故の直前からその後のことを……」

「事故……？」

孝介はナースの言うことを遮るようにして呟いた

ナースは孝介を見て、小さく頷いた

「あ、はい。音無さんは昨日アパート宅の前で……」

ナースがそう言いかけたとき、大きな足音が近づいてきたことに気がついた。すると仕切りが捲れて、外から顔を覗かせてきたのは……孝介もよく知っている母の顔だった

「母さんっ！」

「あらっ……目、覚めたのね」

孝介は驚きを素直に表していた。孝介の実家は山梨県の甲府市だった

甲府にいるはずの母が、東京にいるなんて思いもしなかった

「はねられたのよ、あんた」

母からその事実を孝介は静かに聞いていた。薄々気がついていたが、母の口から聞くと生々しいものだった

自分はあそこで事故に遭ったのか……

「余所見運転ですつて。物騒よね……運転するときはちゃんと前を見て運転するのが義務なのに」

その義務とやらを守れない人がいるから、このような事件が起きるのだ

「……で、その人は？」

「知らないわよ。あたしだって、真っ直ぐ病院に来たんですもの。でも多分、今も署で色々事情聴取されてるんじゃないかしら」

普通の軽自動車だったから良かったものの、トラックなどの重量車だったら、恐らく今の自分はここにいなかっただろう

そう思うと、孝介は軽く身震いした

死亡事故ではないし、骨折とは言え被害者は軽傷で済んだのだ

懲役までとは行かないだろうが……罰金から書類送検ですむだろう
こちらが賠償金を請求するのも無駄な話だ。裁判なんて起こせるほ
どの大きな事故ではないし、よくても入院費を払ってもらえる程度
だろう

もつとも孝介自身、そこまで怒りを覚えているというわけではなか
った

ただ運が悪かったただだと考えていた

「今度ちゃんと謝罪しにくるって」

「その人、もしかして会社員？」

「そうらしいけど……何で？」

「いや……だとしたら、これから先大変になるんだろうな。会社と
かクビにならなければいいけど……」

孝介がそう言うと、母さんは呆れるようにため息をついた

「呆れた……あんた死んでたかもしれないのに……呑気なもんやね」

「そう？」

「あたしはあんたが事故に遭って意識不明だって聞いて、本当に心
臓が止まるところだったわ」

生きた心地がなかったわ、と母さんはげんなりと言った

孝介は大袈裟に事を言う母さんを可笑しく思って小さく笑った

「ありがとう」

「……そうそう。あなたの荷物、ほらー……何か色々入ってる鞆は棚の上よ」

孝介は棚の上を見た。確かに棚の上には自分の鞆があった。楽譜やチューナーが入っていたのを思い出した

「けど……あなたの持ってたギターはダメね。衝撃でケースごとバツキバキ。壊れてたわ」

「……あ……そう……」

不思議とそんなにショックではなかった。むしろ何も感じなかった
今壊れてしまったギターは孝介のアパートに置いてるらしい

「それよりもあなた……」

母さんは怪訝そうな顔を浮かべた

「まだミュージシャン目指してるわけ？」

孝介は答えなかった。母は小さくため息を吐いてから続けた

「あなた、いい加減そんなこと辞めて、早く就職しなきゃ。最近就

職にくい世の中になってるっていうのに……」

「……分かってるよ」

孝介は素っ気なくそういうと、プイツと顔を背けた

解散を決することになった、原因を言ってきたメンバーの一人を思い出した。そいつの言葉と今の母の言葉が重なった

そうなる和无性に腹が立って、孝介は何となくやり切れない思いになった

すると不意に母が立った

「ちょっとあたしは先生と話してくるわ。目が覚めれば、来週には退院出来るって言ってたけどねえ」

「あ……そう……」

母さんはブツブツ何かを言いながら、孝介の前から立ち去った。一人残された孝介は、なんとなく物寂しい気がした

三年間の努力がついに報われなかったことに、悲しみを覚えた。これは悔しさにも似ていた

この気持ちを分かってくれる人はもういない

これから自分はどうすればいいのだろうか……先の未来に不安を覚えていた

こんなことになるなら……最初から普通の人生を歩んでいれば良かった

俺はなんて愚かなのだろうか

こんな自分を戒める日々はいつまで続くのだろうか

孝介は不意に棚の上に置かれた自分の鞆を見た。この中には自分の努力の末、たどり着いた結果がある

……振り返って見るくらい……いいよな

孝介は自分の鞆を取って、鞆の中身を確認した

チューナーを取り出して、電源を入れてみたが……壊れているみたいで、電源がつく様子はなかった

液晶も割れていた……そうとう衝撃が強かったみたいだ

それで足一本で済んだのだ

ある意味ラッキーだったのかもしれない

孝介は音叉おんさやピックケースなど、全てを取り出した

が、一番肝心なものが無くなっていることに気がついた

楽譜がない

今まで三年間、メンバーと練って練ってたどり着いた俺の歌がない

孝介は鞆を閉じてから小さくため息をついた

事故に遭った際、どこかに落としてしまったのだろうか……

無くなっているから、どうしたことだというわけではないが……今まで三年間頑張ってきた結晶が、不慮な事故のせいで無くなってしまったことには、なんとなく物寂しかった

「面白いね」

孝介の耳に確かに入ってきた、その声。自分に向けられたものではないと思いい気にはしなかった

だが……

「面白い曲だね、これ。お兄ちゃんの気持ちがよく伝わってくるよ」
その言葉に孝介は反応した。面白い曲……？お兄ちゃんの気持ちが伝わってる？

孝介はその声の出どころを探した。もちろんすぐに分かった

孝介はベッドの上で足を引きずって、仕切りのためのカーテンを開けた

開けてから横を見ると……そこには一人の男の子が孝介と同じようにベッドに座っていた

手には孝介の楽譜があつた

小学生くらいの男の子が孝介の楽譜を持って、幼い顔立ちの中にある悪戯気な笑顔で笑っていた

その男の子は楽譜から孝介へと視線を向けた

「これ作るのに結構時間がかつたでしょ？」

間違いなく、その少年は初めから孝介に話しかけていたのだ

「でも残念だね。見たところ、詩はいいけど曲調が駄目だ。テンポのアレンジも足りないし……ほら、ここがこういう詩ならスローテンポにしてみたらいいのに。あとどうせだったら、ここ。このメロディーはもっとクールにしてみたら？」

言葉を並べて、孝介の曲を指摘してきたこの少年に、孝介は驚きで呆然としていたせいで、何も言い返せなかった

この出逢いを始めとして……この突如現れた少年と、途方に暮れていた男の夢を追いかける物語が始まるのだった

第3話

孝介は目の前の少年を見つめていた。正確に言えば、孝介の座るベツドの本当にすぐ横にいる少年を見た

その少年は何やらB4の紙を数枚手に持ち、捲り捲りでそれを眺めていた

それは孝介がたった今探していた楽譜だということに気がついたのは、その少年がその紙を眺めながらふと口ずさんで歌ったからだだった

「この想いを歌にするなら、何て歌おうかと考えた。メロディーに乗せて歌えるのなら、どんな歌になるかと考えた……」

孝介はそれを聞いて、あまりの驚きに胸が詰まるような思いをした。今この少年が口ずさんで歌った歌は、紛れもなく孝介自身が作った歌だったのだ

この少年が自分の歌を知っているはずがない。なのにどうしてその歌を歌えるのか……間違いないのは、その少年が手に持っているそれは孝介の楽譜だということだった

「……………どうして……………その歌を知ってるんだ？」

孝介が切羽詰まった顔でそう尋ねると、その少年は逆に不思議そうな顔を浮かべた。「逆にどうして知らないの？」とでも言いたげな顔だった

「これに書いてあるじゃん」

「……どんな曲かが分かるのか？見ただけで？」

その少年はもう一度不思議そうな顔を浮かべた。本当に不思議な物をみているかのような反応だった

「お兄ちゃんは分からないの？ミュージシャン目指してるのに？」

孝介はそう言われて怯んでしまった。そりゃ、孝介だってもう音楽の道に入って七年は経つ。もちろんそれは、孝介が本格的に音楽活動を始める以前のことも数えるのだ

だから楽譜を見て、その曲が実際にどんな曲なのか試しながら弾いて、その曲がどんな曲なのか分かる

そこの過程がないと、楽譜を見ただけじゃ何も分かりはしない

自分が劣っているのだろうか……それとも……

孝介は小さくため息をついた

「ミュージシャンはもう目指してないよ」

「ふうん……じゃあ目指してはいたんだ」

「……君には関係ないことだ。悪いがそれを返してくれ」

孝介はげんなりした顔で手を差し出す。この手に楽譜を渡してくれればそれでいい

しかし少年はすぐには渡さなかった。まるで孝介の言葉を無視するかのように、そしてその楽譜に取り込まれるかのように、じっと楽譜を見つめては小さく笑った

「いい詩を書いているのに。メロディーが良くないんだよなア、これ」

「おい……」

「ほら、ここの“君に送るよ”の部分なんかもさ、もう半音高くして――」

「返してくれっ！」

孝介はその少年のベッドまで身を乗り出すと、少年が持っていた楽譜を乱暴に取り上げた

小学生くらいの子に対しては随分大人気ない行動だと自分でも分かっていたのだが、この少年の言うことに多少の憤りを感じたことは言うまでもない

自分が数年追いかけてきた夢を馬鹿にされてるようだ。例えば子供だろうが、親だろうが、見知らぬ人だろうが、高ぶる感情を抑えるつもりはなかった

ましてやこんな目の前の“ガキンチョ”は何だ

いきなり出てきたかと言えば、人の歌を知ってるかと思えばいきなり指摘をくらわすなんて……

こついうのは……そうだ。親の教育がなっていないのだ

孝介は楽譜を奪い取ってから、目の前の“ガキンチョ”を鼻であしらうと、すぐにしきりのカーテンをしめた。少年はきょとんとしたおもむきでいたが、しきりのカーテンを閉めてからはもう見えない孝介は小さくため息をついた。そして自分の楽譜を目にやる

先ほど指摘されたことに相当の屈辱を感じた。しかしあくまでも子供の言うことなのだから、そこまで相手にすることはない

ただ、たかがそこらの子どもが知った口を聞いたただけだ。しかしそれを自分の曲まで干渉されてしまうと、やはり不愉快ではあった

孝介は急に睡魔に襲われた。先ほどまで気を失って、もう随分長い間眠っていたはずなのに……何故だか酷く疲れていた。気を失ったときは酷く体が疲れてしまうものなのだろうか

孝介は考えるのも嫌になり、楽譜を無造作に柵の上に捨てるように置く^{いっしょ}と、まるで何かに誘われるかのように眠りについた

その間に孝介は夢を見た。夢を見たと言うのは自分でも、これは夢なんだと気づいていたから

その夢では孝介は一人で見慣れたキャンパスの中で佇んでいた。大

学だ……孝介が一年前まで通っていた都内ではそこそのレベルの大学。その音楽科の教室。孝介は目の前の誰かを見ていた

一人、椅子に座って机に向かい何やら紙らしきものに文字を書いているようだ。そいつは孝介と同じように鉛筆を使っている。孝介は最近では珍しく、シャープペンシルよりも鉛筆を好む。孝介の予想が正しければ、おそらくHBの長さはちょうど手のひらを開いた手首から中指までの距離くらいの長さであろう

何故わかるのかと言えば、目の前にいるのは紛れもなく自分だったからだ

自分は佇んでいる、と先ほど言ったが……これは佇んでいるというよりも、存在自体がないのに近くで第三者の目として見ているのだ例えば映画やテレビを見ているような、その中には自分はいないが、確かに映画やテレビの世界を見つめている

そしてこの夢の中では、そんな世界に入り込んでいるようだ

ただし存在自体はない

そんな自分は今自分を見ている。過去の自分と今の自分、対比してみると……やはりあの頃の自分は活気に満ち溢れていた

ただ純粹に音楽で好きで、自分で曲を作ってはそれをギターで弾いて歌った

あの頃はまだ、ただの自己満足にしか過ぎなかった。自分だけの曲を作り、誰もいない場所で、自分に向けて歌を歌った

その方が良かった……

いつからだろう……自己満足では足りなくなり、いつの日か夢を追いかけることになったのは……

目に光が差し込む。現実に戻されたのは、その刺激のためだった

孝介はぐつと力を込めてから、薄々目を開く。光が目染みて、すぐに開けることが出来なかった

しかし音はちゃんと聞き取ることができる

「音無さん、朝ですよ。起きてください」

女性の声がした。孝介の瞳の焦点があつてきたところで、ようやく周りの状況を把握することが出来た

そつだ。自分は今一盛病院で入院をしていたのだ

いつの間にか深く眠り込み、朝を迎えてしまったらしい

そつか……病院では決まった時間にナースがわざわざ起こしに来て

くれるのか……

入院とは楽なものだったりする

だが孝介にはあまり変わりない。孝介のように几帳面で毎日同じ生活リズムを取っているのであれば、誰が起こしに来ようが来まいが、決まった時間——即ち八時前には目が覚める

だが孝介はそんな自負を見事に打ち砕いてしまう。棚の上に置かれた電波時計を見てみれば、既に9時を回っていた

「調子はどうですか？」

起こしに来てくれたナースは中年の少し小太りだった。化粧が濃く、お世辞にも美人とは呼べない

「ああ……わざわざすみません。調子は良いみたいです」

孝介は笑顔を見せてそう答えた。実際、よく寝たというのも踏まえ、体が何となく軽い気がした

「そうですか。それは良かったですね？一応熱を計りますので、この体温計を脇の下に入れてください」

「あ、はい」

中年ナースから家庭でもよく見られる市販の体温計を受け取り、それを脇で挟んだ

孝介は決して女にがつつくようなタイプではない。むしろその逆で、

女がほっておいても寄ってくるくらいだ

日本人離れた堀りが深く整った顔。髪質は難毛。髪型は今時風で、襟足が多少肩に掛かるくらいの長さ。色は茶色のメッシュを入れて
いる

髪色は大学になってから染めた。髪だって今より短かった。それでも整った顔つきが人気を呼び、高校の頃からクラスの女からは人気があった

交際の経験は数え切れない。そして色々な女とも寝た。そちらの方も経験豊富である

そんな孝介は女に対して要望などしない。なのにこのとき、この中年ナースを見て孝介は少し残念に思った

昨日の看護婦……どうしたんだろう

どうせなら彼女に起こしてもらいたかった

そんな気持ちが起こる。自分らしくない……あの看護婦に特別な思いを寄せているわけではないのに

しかし美人だった……若く、それは美しく華やかな女性だった。魅力を感じた……

と言っても彼女と会話を交わしたのも昨日が始めてだし、それもそこまで話し込んだわけではないから……あちらの方は孝介のことなんかまったく気にも留めてないだろう

体温計のアラームが鳴って、孝介は即座に脇に挟んだ体温計を取り出した。孝介は数字も見ずに、すぐに中年ナースにそれを手渡した。中年ナースはそれを受け取ると、そこに書かれた数字を凝視する

「……36.5度……平熱ね」

そう言っただけで彼女は用紙に何かを書き足した。恐らくその用紙は患者の健康状態を記したものなのだ

「朝ご飯はどうですか？食べられますか？」

「ええ。そういえば昨日から食事を取ってないから……少しお腹が空きました」

実際その通りであった。孝介は昨日……いや一昨日の夜に事故にあって、昨日の夕方頃に目を覚まし、そしてまた今朝目を覚ました

食事を一昨日の夜、ファミレスでハンバーグステーキを食べた以来である

だから結構お腹が空いている

「分かりました。すぐに持ってきますね？何かあったら、そのナースコールで呼んでください。すぐに他の看護婦が駆けつけますから」

彼女はそれだけ言うと、失礼しますと言ってから病室を後にした

孝介は小さくため息をついて、ベッドに寄りかかる。そこで電波時計の下にメモらしき紙を見つけた

紙を取ってみると、母からだった

孝介へ

よく眠っているようなので、母さんは帰ります。あなたの部屋、掃除しておくね。それとあまりウロウロせず、安静にしとけば手術をして、二週間かそこらで退院出来るそうです。またお見舞いになります

母より

孝介は手紙を読み終わると、再びため息を吐いて手紙を棚の中にしまった

やはり手術はするらしい。恐らく今、右足は複雑骨折をしていて、それを矯正するために骨にボトルを入れて固定する手術をするのだろう

二週間かそこらで退院出来るというのは、恐らく数日間検査を受けた後、手術をして、もう半分はリハビリなどをして退院という予定でいるはずだ

しかし……まさか一盛病院で入院するとは……この東京都江戸川区

に在る一盛病院は、主に介護福祉を重点視した病院のため、やはりこの病室内でも老人が多い

とびきり孝介だけが若く、少し浮いている気がした

そんなときに孝介はふと一度昨日目を覚まして、そのときに奇妙な少年と会話をしたことを思い出した

孝介はチラリと隣のベッドをしてみる。しかしベッドには誰もいなかった。いや、誰かしらが使っている形跡はあるが、今そこにはいない

確かにそのベッドには奇妙で生意気な“ガキンチョ”が一人……

恐らくトイレか何かに行っているのだろう

帰ってきてからまた色々と話しかけられるのも面倒なので、孝介は仕切りのカーテンを閉めた

第4話

朝の時間を終えて、孝介は昼前頃の時間を読書をして潰していた

朝ご飯に食べた病院食は不味いと聞くが、そんなことはなく美味しく頂くことが出来た

孝介自身、お腹がとても空いていたみただから、どんなものでも美味しく頂けそうだった

そして今、孝介は特に何かをすることもなく暇を持て余している。母からの差し入れみたいな物で、棚の中に本が数冊置いてあったのを見つけて今それを読んでいる

司馬遼太郎の作品が主にあった。孝介は中学の頃から司馬遼太郎の作品は好きだった。母もそのことを知っていたので、古書店屋でわざわざ買ってきてくれたのだ

しかし母には申し訳ないが、母の買ってきた作品はいずれも読み終わっているものだった。そのため普通なら難しい文体で構成されている司馬遼太郎の作品も、行き詰まることなく読み進めることが出来た

内容は知っているけれど、こうしてもう一度読み直すのも中々面白いものだと思った

そんな読書の時間を楽しんでいた。一冊の半分を読み切ったところで、孝介は本に詩織を挟んで軽くため息を吐いた

それにしても入院生活というのは思ったよりも退屈なものである
安静にしていなければならないために、何もすることができない。
ましては足を怪我している孝介は自由に歩くことすら難しい
せめて誰か話し相手がいてくれれば……

朝ご飯の病院食を食べ終えた後、何かないかと棚の中を見たところ
司馬遼太郎の小説と共に孝介の携帯電話と財布があった

携帯電話はまだ使えることが出来たものの、液晶画面に大きく罅が
入って液晶が漏れかけていた

しかし何とか解読することが出来た

見ればメールが何件か溜まっていて、開いて見ると友人からのメー
ルだった

殆どが事故に関するメールである。二つだけ、他のメールとは違う
内容だった

孝介のセフレ関係の相手からのメールだった。今度いつ会えるかと
いうニュアンスが込められたメールだった

さつきも言った通り、孝介は女に困ったことがない。と言っても、
今現在心から愛し合っている人がいるのかと言われればそうではない
この相手との間にも愛などは存在しない。飲み仲間には誘われた先の

店で声をかけられて知り合った程度である。適当に話していく内に意気投合し、時間が経っていく内にホテルで行為に及んで今の関係が始まった

以来月に何度か会い、軽く食事をしてお互いの欲望を満たし合う関係になった

念を押して言うように、二人の間に愛はない。ただ体の相性が合うだけで、他には何もないのだ

だからお互いのことを殆ど知らないでいる。きっと孝介が事故に遭ったことも、相手は知らないのだろう

こんな状態でこんな文面のメールは場違いかな、と孝介は可笑しく思い返信はしていない

事故のことを知り、心配してメールをくれたことを孝介は嬉しく思っていた

自分には自分のことを心配してくれる人が身の回りにこんなにいたことを気づかされた

普段の人付き合いがいかに大切かを気づかされた

その中で嬉しく思ったのが、今日わざわざお見舞いに来てくれるやつがいるということだ

孝介はその来訪者が来るのを心待ちにして、今の時間を潰していたのである

恐らく見舞いにくるのは昼過ぎくらいであろうと思われた

ずっと本を読んでいたためか、些か目が疲れてしまったようだった。急な睡魔に襲われた。昼の病院食が運び込まれてくるまで、目を休めようと目を閉じた

そのときだった

仕切りのために閉めているカーテンの外がやけにざわめいていることに孝介は気づいた

最初は何だろうと思いつつ、不思議に思った。だが、大方どこかの見舞い客だろうと孝介は思った

特に気にすることはないだろう、と孝介は再び目を閉じた

するとざわめきとは違う音が孝介の耳に入ってきた

クリーンな音色、一つ一つの音階ごとに高さを増す

孝介は聞き慣れたそのギターの音に再び目を開けた

仕切りのカーテンの外から、一度だけ聞こえたその音が気になり、孝介は仕切りのカーテンを開けた

すると、隣のベッドに、あの“ガキンチョ”がいた

ベッドに居座り、アコースティックギターを持ちながら……

第5話

アコースティックギターを持っているその少年を孝介は驚きながら見つめていた

病院内で何故ギターを持っているのか、という疑問もあつたけど、何故この子の周りには人が集まっているのだろうかという疑問の方が強かった

彼のベッドの周りにはこの病室内で入院している患者、主に老人だが、それだけではなく恐らく他の病室からの訪問者もいるのだろう。老若男女の患者が十数名辺りが彼のベッドを囲んでいた

中には子どもも含まれていた。病院服ではないと分かれば、おそらく見舞い客に連れ子に違いない

ところでどうしてこのような状況になっているのか、孝介には理解し難い状況だというのははっきり言える

しかしこれから何が起こるのだろうか、というのはなんとなく分かる

少年がギターの弦を弾いた。綺麗な雑のない音色を奏でる

すると少年は途端に続けて弦を弾き始めた。この病室内で、彼が奏でる音が流れ始める

弦を弾きながら、時にはボディを叩き違う音を入れる。テンポを取るように、ボディを叩いて……

ただの弾き語りではなかった

一本一本を丁寧に弾いてみたり、時には弦全体を手のひらで叩いたり、時には弦を全く弾かなかったり……

そして何よりこの音楽には歌がない。少年は歌を歌うことなく、ただひたすら音を奏でている

そして……多分おそらくこの音には決まり事などないのだろう。即ち楽譜というものが存在しないのである

クラシックと呼ばれるのだろうか、しかし使っている楽器はクラシックギターではなく、アコースティックギターである

彼はギターの弦で音楽を奏でているのではない。ギター全体、その楽器全てを使ってこの音楽を作り出している

そして、この引き込まれる空間を作り出しているのだ

孝介ですら、彼が作り出している世界に魅了されていた

彼の音楽は何故か心を湧かせる不思議な感覚にさせる

この音楽は絶望に陥っている者ほど、本質に触れることが出来るのではないのだろうか

孝介がまさにそうだといえた

夢に破れた自分は今絶望に伏しているが、この音楽を聞いていると何故か楽しい気分になれる

そして何故か絶望という念を振り切ることが出来そう、という気持ちになる

それはこの音楽を聞いている全ての人たち、みなそうなのではないだろうか

行く末が見えない者がこの中にいる。いつ死が待ち受けているのか、それも分からず、孝介のそれ以上に絶望に伏せ、恐怖と戦っている者だっているだろう

そんな者がこの音楽を聞いてみたらどう思うだろう

あまりの気持ちに激しい変動に驚き、それと共に感涙の涙を流すだろう

生きる希望を見いだせるだろう

孝介の言うことは大袈裟に捉えるかもしれないが、孝介自身そう感じてしまうのだから仕方がない

凄い……

孝介は聞きながら心の中でそう唱えた

凄い。この音楽は凄い

自分には到底作り出すことの出来ない世界だ。こんなに凄い音楽が、自分にこの先作り出せるとは思えない

それだけに孝介はショックだった。自分はまだまだ未熟だった。愚かな夢い夢を追いつける無謀人だったのだ

それに気がつかされたとき、孝介の中で吹っ切れるような思いが芽生えた

今ならあるとき自分の音楽を真つ正面を向いて見ようとしなかった、レコード会社のプロデューサーに賛同出来る

自分を客観的に見る、という本当の意味はこういうことを言うのか
もしれない

すると孝介は自分の目に流れていた暖かいものに触れた。自然と涙が流れていた

彼の音楽によって自分の愚かさ気づかされた。逆に溜まっていた
思いが放出され、心が癒やされているのだ

癒やしの音……とでもつけようか……

「カナデッ！」

その音楽を抑止した声が響いた。孝介はその声ではっと我に返った。病室の入り口から女性の声が響いたのだ

少年はその声に驚き、ギターを弾くのを止めて入り口の方を見た。そして苦汁を舐めるかのような笑みを浮かべる

孝介も入り口に視線を向けると、急に胸が高鳴った

そこにはあの女性の看護師が立っていた。若く、輝かしい美麗を纏っている。長い黒髪がさらに綺麗さを引き立たせている

しかし表情は険しい。どうやら怒りの形相を浮かべているようだ。そしてそれはどうやら少年に向けられているらしい

その女性の看護師はズカズカと足音を立てて、その少年のベッドの隣へ近づいた

「もうっ！病院内でギターを弾いたらダメッて何度言わせれば分かるの？他の患者さんたちに迷惑でしょっ！」

ごもつともな意見であるが、孝介は迷惑というよりもむしろ貢献されていた側だ

恐らくこの病室内にいる人たちも同じ気持ちだろう。彼らの表情を見ていれば分かる

「本当に、あんたったらもうっ！」

「ま、待ってよお姉ちゃん……みんなが僕の音楽を聞きたいって」

「そういう問題じゃないのっ！」

どうやらかなりの逆鱗に触れてしまったようだ。が、孝介が気になっ
ているのはそこではなかった

この二人は……姉弟なのだろうか？

そしてこの少年の名前は……

その看護師は周りの皆に丁寧な頭を下げて謝っている。少年はふて
くされるようにそっぽを向いていた

丁寧に謝っているが、もちろん周りの皆は怒ってなんかいない。む
しろ嬉しそうだった

笑顔だ

皆、心の底からの笑顔を見せている。孝介はその光景にも魅了された
自分もこんなアーティストになりたかった。自分の音楽を歌を曲を
聞いてくれている人たちに、希望を持たせるような、笑顔に変える
ようなそんなミュージシャンに……

だから、また凄いと感じた。目の前でふてくされているこの少年が
……凄いと。

「音無さん」

孝介はふと、その看護師に話しかけられた。再び胸が高鳴ったのを感じた。看護師は申し訳なさそうに丁寧にお辞儀をした

「本当にごめんなさい。音無さんにも迷惑をかけてしまっ……」

「あ、いえ……そんなこと……」

「あ、お兄ちゃんっ！起きたんだね」

少年は孝介に向けて子供らしい笑顔を見せてきた。孝介はその少年を見つめて、小さく頷いた

「良かった。僕、昨日いけないことしたかなって思ってたんだ。お兄ちゃん怒らせちゃった。まだ怒ってる？」

「え、いや……」

「本当に？良かったっ！」

何だ……孝介はそう呟いた

やっぱり、普通の子供じゃないか。それも昨日のことに対してしっかり罪悪感を感じる、可愛いとこのある子供じゃないか……

こんな子供が……

すると少年の後に続いて、看護師が愛想笑いを浮かべてきた

「^{かなで}奏が昨日、音無さんに失礼なことを言ったそうで……すみませんでした」

「……カナデ？」

孝介がそう聞き返すと、少年が元気よく反応を見せた

「うんっ！僕っ。僕が奏っ！^{たかのかなで}高野奏だよっ！」

この少年の名前、高野奏……不思議な音楽を見せる少年か……

「お兄ちゃんは？」

「え？」

「名前だよ」

「あ……音無だ。音無孝介」

「音無……孝介……」

奏は孝介の名前を繰り返して呟くと、可笑しそうに吹き出した

「ミュージシャン目指してたくせに、音無って。縁起良くないね」

「……余計なお世話だ」

低い声で奏を睨みつける

やっぱり……糞生意気な“ガキンチョ”である

「こらっ！奏っ！失礼でしょ。ど、どうもすみません」

看護師がまた慌てて謝ってくる。孝介はその際に、白衣につけられたネームプレートを見た

ながたに
長谷……

名字が違う？

姉弟ではないのか？

「でもさ、名前って肝心だよ。ほら、姓名判断とかもそうじゃん？あと改名したりして運気を上げたりとかする人だっているし。名前って肝心だよ。うん」

「奏っ！いい加減にしなさいっ！」

長谷という看護師が顔を紅潮させたとき、入り口の方から孝介を今朝起こしてくれた女性の看護師が入ってきた

「長谷さん」

「あ、はい」

「201号室の谷川さん、検査の時間よ？」

「あっ！す、すみません……すぐ行きますっ！」

長谷がそう言ってから、再び奏を見て儼かな表情で言った

「いい？今度病室内のみなさんに迷惑かけたら……もうギター取り上げだからねっ！」

「……はア……」

「私は行くけど、大人しくしてなさいよ？この間買ったゲームしていいから。分かった？」

「分かった。それよりお姉ちゃん。早く谷川さんのところ行ってあげなよ」

長谷は呆れるようなため息を吐くと、孝介に視線を向けて笑顔を浮かべた。そして深々とお辞儀をしてきた。孝介も慌ててお辞儀を仕返すと、長谷は急ぎ足で病室内を出て行った

長谷が出て行った後、奏はうんざりしたように大きくため息を吐いた

「ふうッ……疲れた。まったく、大袈裟なんだよなア。お姉ちゃん
は」

奏はそう言って、孝介を見た

「うるさいでしょ？お姉ちゃん。いつもあんなんだ。僕の音楽が嫌いなのかな？」

「……そういうわけじゃないと思うが……彼女の仕事上、君の行為を無視出来ないだろ」

「ふうん……大人って大変だねー。いいじゃない。みんな僕の音楽を聞いたがってるんだもん」

「病院内でギターを弾くという行為は非常識なことだ。無理もない」

奏は首を傾げた。何故非常識なことなのかを理解出来ないらしい

「……それより……誰に習ったんだ？」

「何が？」

「ギターだよ。さっきのを見てる限り、凄腕だ。君ぐらいの年であんなに弾けるやつ、めったにいない」

「そう？」

奏はそのことも理解出来ないらしい。不思議そうな表情を浮かべてから、笑顔で言った

「誰からも習ってないよ？自己流さ」

「自己流？すごいな君は」

「そんなに大したことじゃないよ。お兄ちゃんだって弾けるでしょ？ギターくらい」

「……少なくとも君ぐらいの年では弾くことはなかった」

孝介が感銘を受けながら、ため息をついた。そんな孝介を見ながら、

奏はふーんつと呟いた

「……さっきの曲は……」

奏がそう呟いてから、孝介に笑いかけた

「さっきの曲は、今僕がアレンジして作ったんだ。みんなが元気になれますようにって祈りながらね」

「……弾きながら作り上げていったということか？あれを？」

「そうだよ。気持ちだけを込めてね。どうだった？」

孝介はあまりの驚きに声が出せずにいた。あの曲に感じた自由さ、そのところだったのだ

奏は孝介の反応を見て、天井を仰いだ

「僕はね、聞こえるんだ」

奏はそう言つと、さらに続けて言った

「僕の周りを囲んでいる全ての音が。僕には鮮明に聞き取ることが出来る」

意味が分からなかった。全ての音とは……一体どういうことだろうか……

「例えば空気の流れる音、風の音が僕には綺麗なメロディーに聞こえる。走っている車のエンジン音が、僕には激しいメロディーに聞

こえる。人の話し声が、僕にはマラカスのようなリズムに聞こえる……」

そう言うと、奏は目を閉じた。そして、何をするのかと思えば、途端に布団を叩いた

布団を叩いたときに奏でた、パンツと乾いた音。そして、さらにすすりの金属部分を叩けば、高い金属音を奏でる

奏はそれらを急に叩いては奏で始めた。ただ叩いているのではない……その音が、組み合わせたって一つの曲になっているのが分かる

孝介はその曲を聞いてさらに感銘を受けることになった

「こんな風にね」

奏は得意気な表情を浮かべて孝介に言った

孝介は声を出せず、ただ奏を見つめていた

凄い……何なのだ。こいつは……どうしてそんなことが出来る？

「君は……天才だな。まさに、神童だ」

神童……

孝介はその言葉が浮かんだ。稀にいる、絶対音感を持った天才が……
音の神童がまさに奏なのではないか？

あの有名なモーツァルトも、絶対音感が備わった神童だと言われていた

奏はまさにそうなのだ

「……僕が神童？それは違うよ」

「いや、君は神童だ。自分の凄さが分からないのか？」

「違う」

奏はそう言い張った

「僕は神童じゃない。天才でも何でもない……僕は……僕はただ、音が好きなだけさ」

奏は孝介を見て、笑顔でそう言い張るのだ

第6話

「僕は“音”を“楽”しむのが好きなんだよ。ただそれだけ」

そう言い張る奏に孝介は一種の屈辱感を感じていた。才に溢れている者ほど、そう言う。一つの物事に対して才に満ち溢れ、優れている者はその本質を見抜き、心の底から楽しもうとする

例を挙げれば、スポーツなんかもそうである。甲子園に出場してレギュラーを勝ち取り、メディアのインタビューに答える高校球児は決まってこう言う

好きな野球……楽しい野球……

好きな野球のためなら努力は惜しまないと……

孝介から言わせれば、そんなのおかしい。矛盾している

幾ら野球が好きだって、楽しからって、努力ではどうしても超えられない壁というのはある。その辺の弱小高校に属する野球部員がその例だ

彼らは毛頭甲子園に出場する気はないはずだ。県大会でそこその成績を残せればそれで満足なのだ

理由はなぜか？知っているからだ。自分たちがどんなに頑張っても全国レベルで戦っていくことは不可能に近いと……

高いレベルでやるためにはもちろん努力は必要だ。そんなこと分かっているし、世の中の理だとさえ思っている。が、しかしやはりそこには満ち溢れた才能が備わってなくてはならない

才に満ち溢れた者、その才を磨き上げることが出来る者だけが勝者となり得るのだ

「君には才能がある。それは間違いないだろ。誰もが君みたいになれるわけじゃない」

孝介は低い声で唸るように奏にそう言った。その屈辱感を持つてぶつけることが今の孝介にとって一番気が楽になれるからだ

しかし奏はまたもや首を傾げた

「そんなことないよ。そりや僕にはちょっとした音感っていうのはあるかもしれない。だけどそれだけさ。あとは何もない。ただ純粹に音楽が好きなんだ」

「それは才能に満ち溢れた者だけが言えることだ。俺みたいな凡人には皮肉にしか聞こえない。君の言う通りなら、誰でもビートルズ並みのミュージシャンになれるし、誰でもマラドーナみたいなサッカー選手になれるってことになるぜ？」

「そんなの屁理屈じゃなかア。分かんないかなア？大人は頭が固いね」

奏にそう言われて、孝介は黙り込んだ。屁理屈……確かに奏の言うとおり、少し大人気ない言い方をしてしまったかもしれない

しかし孝介は持論に間違いはないと確信していた

「君が羨ましい」

孝介はため息混じりでそう呟いた

「俺も君のように才に恵まれてればよかった。君の音楽を聞いて、自分がいかに愚劣だったかを悟ったよ。君の言うとおり……俺の作る曲はダメなものばかりだ」

「まア、そんなしょんぼりしないでよ。確かにお兄ちゃんの曲は良くないけどさ」

改めてそう言われると、むっとくるはずだったが、この生意気な“ガキンチョ”に言われても納得してしまうほど孝介は意気消沈していた

しばらく沈黙が続く。孝介は奏から窓の外へと視線を変えていた

空は澄み渡っていた。雲一つない青空である。一昨日の雨の日とは打って変わっての気持ちのいい晴れ空だった

「……ねエ、お兄ちゃん」

奏がゆっくり孝介に話しかけてきたと思えば、奏は自分のベッドから立ち上がって孝介のベッドに近づいていた

手には取り上げられるかもしれないアコースティックギターを持っている。そうかと思えば、ギターを投げ出すように孝介に渡してきた

孝介は慌ててそれを受け取った。反動で音が微かになる。孝介の好きな澄み切った音色だ

孝介はそのギターを目を凝らしてよく見た

真っ白なボディに黒っぽい茶に染まったフラットの部分。弦は錆びている様子はないが、よく見るとボディのあちこちに小さな傷がある

孝介は小さくため息をついた

「楽器はもっと大切に扱え。それと……何のつもりだ？」

孝介がそう聞くと、奏は孝介のベッドに腰掛けて笑っていた

「お兄ちゃん、あげるよ」

「は？」

孝介が聞き返した。ギターをあげるという意味で捉えたが、実はそうではなかった

「あげるよ、お兄ちゃん。僕の音楽を、全部あげる」

孝介はしばらく何も口を聞けなかった

正確な意味を捉えることが出来なかったというのもあるが、それだけではない

奏の目に魅了されていた。そこら辺の子供とは違った目をしていた

澄み切った目だ。何にも捕らわれることのない、強い信念を持つて
いることが何故か孝介には感じられた

顔つきは幼いものの、その瞳には確固たる信念、覚悟が秘められて
いる

笑顔だが、その笑顔はどこか心の底から嬉しそうだけど、なんとなく
寂しそうなものに見えた

孝介はしばらく啞然としてからはっと我に返った

第6話（後書き）

健です

この作品は丁寧な描写を意識しているため、登場人物の心情などが長く描かれている場合があります

もしかしたらそれを好まない方がいらっしゃるかもしれませんが、これがこの小説のスタイルなのでご了承ください

読みにくい部分があれば、ぜひ感想や評価の方に書き込んでください

参考にさせていただきます

皆さんの意見を反映していく小説にしたいと思いますので、ご協力
よろしく願います

ゆっくり時間をかけて読んでいくことをお勧めします

自分もゆっくり時間をかけて更新していくつもりなので

月乃民さん、評価第一号ありがとうございました。執筆していく上
での大きな原動力となりました

皆さんこれからもよろしくお願いします

第7話

その瞳に我を失いつつあったが、ふと我に返ることの出来た孝介は小さくため息を吐いた

「何をくれるって？」

孝介がそう聞き返すと、奏は笑顔のままもう一度答える

「僕の音楽」

「意味がよく分からないんだが……何が言いたいんだ？」

奏はその言葉を受けてしばらく黙り込んだ。ベッドから立ち上がり、窓の方へと歩き出した

施錠を開き、窓を開けると心地よい春の風が吹き込んできた

「お兄ちゃん、もう一回ミュージシャン目指そうよ」

「は？」

突然の提案に、孝介は驚くように声を上げた

「僕といっしょにミュージシャン目指そうよ。昨日の曲を見てそう思ったんだ。お兄ちゃん、曲は良くないけど詩はいい。だから曲は僕に任せて、お兄ちゃんは詩を書いて。作詞はお兄ちゃん、作曲は僕。二人で一流のミュージシャン目指してみようっ！」

奏の提案に孝介は少しの間拍子抜けした。それから考える間もなく、小さく笑った

「お断りだな」

「えっ？何でエッ？」

「君が思ってるより簡単なことじゃない」

「簡単じゃないか。一つの歌を二人で作ろうって言うてるだけだよ」

「それが難しいと言ってるんだ。第一どうして出会って間もない俺たちでそんなことをしなくちゃならない？俺には生活がかかっていて、リスクがでかい。ミュージシャンになりたいなら、大きくなってから目指せばいい。俺とは違って、君には夢も才能も将来にも希望がある」

孝介がそう言うのと、奏の表情から笑顔が消えた。靡く風がその柔らかな髪を踊らせる

「……希望なんてないよ」

奏は静かにそう呟いた。孝介はそれを聞いて不思議そうな顔を浮かべる

「……どういうことだ？」

「僕には希望なんてない。時間なんてないんだ」

奏の言葉に孝介の中である予感がした。不吉な予感というのはこれに似た感情なのだろうか。奏の言葉にはやけに重い響きがあった

「……君は……」

言葉が続かなかった

目の前の少年が背負っている先の見据えた運命に気づいてしまったから

孝介の考えていることに気づいたのか、奏はまた孝介を見ると寂しそうに笑った

「うん。僕、病気なんだ」

「病気……何の病気だ？」

「分かんない」

「分かんないってことはないだろ」

「多分……心臓の病気かな？お姉ちゃんが教えてくれないんだ」

孝介はなんとなくその系統の病気だろうということは分かっていた
癌というわけではない

孝介の父親は、八年前に癌で他界した。発見したときには既に末期癌で、内蔵の幾つかに転移していた

もはや助かる見込みはない、そう分かっているとしてもその苦しみ、激痛を抑えるために何度も投与され続けていた抗がん剤。その副作用でやつれ、頬は骨張り、頭髪も殆ど無くなっていく哀れな父の姿は、当時中学三年の孝介は衝撃を受けた

奏を見る限り、外見に変わった変化はない。内部的な問題だと思っ
てはいた。しかしそんなに重いものなのだろうか

「でも自分の体のことだから。自分でよくわかる。多分、僕はもう
そんなに長く生きられない」

「……そうか……」

孝介はかけてやる言葉が見つからなかった。厳密に言えば見つかつて
いる……が、こんなことを言われても、見つかるのは全て同情込
んだ言葉ばかりだ

そんなものは望んでいないはずだ。孝介が同じ立場だったらそう思
うだろう

現に、今夢に破れた孝介は酷く落ち込んでいた。そんなときに

「頑張り」だの

「落ち込むなよ」だの言われても、心には響かない

むしろ、母のような言葉をかけてもらった方が現実を生きている気
がして、幾分か気が軽くなる

だから奏には何も言えなかった

まだこんなに幼い

本来ならば、将来に希望の持てるはずの年なのに……自分の運命を受け入れている

そして何よりもつたいない。素晴らしい才能を持っているのに……

「……だから僕には時間がないんだ」

「それは分かったけど……でも何で俺なんだ？俺以外のやつにすればいいだろ？俺なんかより、少しでも才能を持っているやつなんか幾らでもいるはずだ」

そう言うてから自分の愚かさに孝介は気づくことになる。そう聞いてしまっているその時点で、孝介は既にこの子の情に流されてしまっているのだ。じゃなかったらこんな聞き方はしない

さつき自分で思ったように、こいつは同情などされたがっていないしかしそれでも同情の念が生まれている自分を戒めなくなり、下唇を噛み締めた

「お兄ちゃん？」

奏が孝介の様子を変に思い、声をかけてきた

孝介はしばらく俯きながら小さくため息を吐いて、何でもないとき返す

奏は孝介のことをぼうつとしばらく見つめ、それから視線を窓の外

へと向ける

「理由なんてないよ」

「え？」

「理由なんてない。お兄ちゃんを選んだ理由なんて……ただお兄ちゃんがあるに過ぎない。僕の夢を……叶えられる唯一の可能性がお兄ちゃんだけ」

孝介はその言葉を聞いて、しばらく呆然とした後、この目の前の少年に非常に腹立だしい気持ちを感じた

つまり奏の言いたいことは……理由なんてない。誰でもいいということだ

奏自身が言うには重病を患っているため、ろくに外を出歩ることが出来ないのだろう。つまり外の世界と閉ざされたこの病院内で出会う人というのは限定されてくる

つまり奏は今まで、ミュージシャン、あるいはそれを目指しているもの、それが過去の者に出会うことがなかったということだ

自分の中で素晴らしい音楽を作れても、自分一人ではその夢とやらを叶えることが出来ない

だって奏はまだ見た目小学校低学年あたりの年なのだ

しかし小学校低学年にしては、かなりの知能も備わっていることが先程からの孝介との会話から想像がつくだろう

それと、自分の夢を現実にするための手段を具体的に考えだすことが出来るこの少年の知能はそこの小学生とはまず違う

そう考えれば、この少年はやはり凄さを増すのだが、プライドを傷つけられた思いになっている孝介は目の前の少年をただのバツの悪いクソ生意気なガキンチョにしか見えていなかった

孝介は小さくため息を吐いた

しかし孝介自身、悪い話ではない。こいつから才能、即ち音楽を摘み取っていけば、それをまるで自分のものにしていけば孝介は恐らく一、二年の間でかなりメジャーなミュージシャンとなれるはずだ彼の奏でる音楽はそんな気持ちを鼓舞させるほど、圧倒に魅了されてしまうようなものばかりだった

奏の奏でる音楽を上手く利用すれば俺は……

もちろん、それには色々な物を捨てる覚悟が必要だ

無論俺は、そちらを維持することを選ぶだろう

第一、彼の夢とは何だろう？孝介は少しもそのことを聞き出そうとは思えていなかった

答えを決めていたからだ

「……悪いが……俺はお断りだ」

孝介がそう言うと、奏は再び笑顔から落胆の表情へと形を変えた

「えっっ?」

「君が過酷な状況下に置かれてる身、だというのはよく分かった。だからこそ、君には大きな夢を抱いて欲しい」

「だったら——」

「だが、だからと言って君に協力する義理はない。それに俺はこれから生活をするために、仕事も探さないといけない。いつまでも好き勝手にはしてられないんだ。気楽に夢を追いかける年でもない。悪いが他を当たってくれ。話は以上だ。それじゃ」

孝介はギターを奏に返すと、仕切りのカーテンを勢いよく閉めた

閉め際に奏の寂しそうな表情が目に見えた

孝介がそう選択したのは、一つがプライドを維持するためだ

二十歳を過ぎた大人が子供の言いなりにはなりたくないということだ
もう一つと言えば……同情の気持ちを切り捨てたいということだった

カーテンを閉めてから、孝介は横になって目を閉じた

足音がゆっくりとヒタヒタと聞こえる。奏がしょんぼりとしながら歩いている光景が目に見えた

足音が止まってから、しばらく沈黙が訪れた

その沈黙を破るのは、そう、ギターの奏でる音

第7話（後書き）

ふう……

孝介と奏の出会いが始まり、孝介は奏の誘いをきっぱり断りました

え？これで終わり？

いやいやいや（笑）

次の話から、再び孝介の日常的な場面が訪れますが……どうやら彼には小さな心境の変化が見えてきて……

今回はかなり時間が飛びます

また、評価感想をしてくださったRRRさんありがとうございます

評価感想は作者のやる気に繋がります

なので、評価感想をよろしく願います

また何か御要望や意見がありましたら、ぜひ作者へのメッセージで教えてください

これからもよろしくお願いします

第8話

「……あら？どうしたの？」

ベッドに潜り込んでいた長い亜麻色の髪がくしゃくしゃになり、化粧も落ち掛けているけれども、元的美貌により美しい顔は変わらない、裸体の女。陽子ようしが孝介の背中を見てそう言った

孝介も同じく裸体であつたために、脱ぎ捨てられたパンツを履いた。そしてベッドに腰掛けると、棚に置いておいた煙草に火をつけてふかした

「……ねえ。もう帰っちゃうの？」

孝介に寄り添い、甘い声で語りかける。その妖艶な瞳で孝介を見つめながら、そっと右手を握る

「もう一回だけしようよ……」

孝介の右手を握りながら、陽子は自分の胸へと押し当てる。柔らかく暖かい、また堅い突起物のような感触を感じる

「ここだって……まだ収まらないんだからア……」

その手を腹部へと移動させ、下腹部、そしてその裸体の秘部へと到達した。生暖かく、しつとりと濡れた感触が孝介の体を震わせた。陽子は微かに喘ぐ声を漏らす

「よせ」

孝介は右手を振り払って、陽子を見た

「これから仕事なんだ。今日はお終いだ」

孝介はそう言うと、同じように脱ぎ捨てられてたシャツを着て、身だし並みを整えてから髪型をチェックする

「忙しいんだ」

「さほどでもないけどな。今日はもう時間がない」

「残念。久しぶりに会えたって言うのに」

彼女の言葉に、愛は込められていない。無論、孝介もそういうつもりで受け止めているわけではない。陽子は孝介に求めているのは愛ではなく、自分の欲望を沈めてくれる肉体である

孝介は車のキーをポケットに入れて、煙草の火を消した。財布から万札を二枚か三枚ほど取り出した

「今日は俺持ちだったな。ホテルの鍵はフロントに返しとけよ」

「次はいつ会える？たまにはあなたから誘って欲しいわ」

「俺は性欲に飢えることがないから」

「いけ好かない人」

陽子は妖艶に笑って見せた

「でもあなたの体は最高。あなたとするの、すごく気持ちいいんだもん。また連絡するね」

つまり孝介はこの女の乾いた体を潤す道具に過ぎないわけだ

それを分かっているが、勿論孝介にだって得はある。陽子は元グラビアアイドルだったためか、その体は人並み以上の快感を与えてくれる

そして際立つ大人の色気を漂わすその美貌も申し分ない

だからこそ、陽子とはこうした関係が続けているのである

孝介は小さく笑うと、裸のままベッドに座っている陽子に近づくと力強く押し倒した。もう終わりと思って油断していたためか、陽子は小さく悲鳴を上げた

顔と顔の接近度は言うまでもない

孝介はその吸いこむような瞳で陽子の瞳を見つめた

そしてそのまま唇を重ねる。ねっとりとした濃厚な舌触り……

唇を離すと、孝介は小さく笑った

「ああ。待ってる」

孝介は耳元でそう囁くと、すっと身を引いて鞆を持ってドアの方へと歩き出し、部屋を後にした

ホテルを後にして、孝介はゆっくりと息を吐く。目の前には流れる人混み。先程まで誰にも邪魔されることのない時間、空間を保持していたものだから、いきなり現実に引き戻されたようでまったく嫌になる

孝介は腕にしてある時計を見た

上野駅に八時には着かないとならない。ここ渋谷から上野はさほどの距離ではない

ここ渋谷からメトロ銀座線で三十分程度の距離である

しかしこれから自宅のある江戸川まで行こうと思ったのだが、恐らくそんな時間はないだろう

ホテルでシャワーを浴びておくべきだったのかもしれない

今日の仕事は、そんなに大した用事でもない叔父から話を聞いている

探偵業を営む叔父によると、人探しの依頼を受けていて、ようやくその対象を見つけ出すことが出来、今日上野駅の近くの喫茶店で会合し話を聞くのだという

話を聞くのは報告書に書き込むためである。それらを全て段階を踏んでから、依頼者に経費を請求するのだ

その報告書に経緯を全て書き込むこと、それが今現在叔父の下につき、助手として働いている孝介の役目である

出勤者、またはチャラチャラした十代の若者が多く流れる人混みの中に孝介は足を踏み出した

急ぐことはない。上野駅まで行くのにさほど時間もかからないし、約束の時間まではまだ余裕がある

だが気持ち的に急かしているのは、この人混みであった

第9話（前書き）

今回も結構長い文体が続きます

ゆっくりとお読みになってください

第9話

孝介は東京メトロ銀座線ではなく、山手線を利用して上野駅へと向かった

理由は大したことではない。山手線の方が使いなれているためである
七時二十分発の電車に乗った孝介は約三十分をかけて、JR上野駅についた。時刻は七時五十一分。ちょうど良い時間だろうと孝介は思っていた

上野駅を出てすぐ目の前に、うえのおんじこうえん上野恩賜公園があつてそこで待ち合わせている

上野恩賜公園は通称上野公園とも呼ばれているのは有名なところである。また別名で“上野の森”とも言われたりする

他にも武蔵野台地むさしのだいち末端の舌状台地“上野台”に位置することから、“上野の山”とも呼ばれる

総面積約五十三万平方メートルとかなり広く、東京都建設局の管轄地になっている

上野恩賜公園内には博物館又は美術館、文化施設が多く点在している。そのため学生の東京見学ではほとんどの場合でこの上野に立ち寄る。上野恩賜公園の左方に“上野の森美術館”がある。右方の方からは並んで文化会館、向かいには西洋博物館がある。いずれも孝介は入ったことはないが、ルールやゴッホなどと言った世界、いや歴史上のその名を刻んだ芸術家の展覧会がそこで行われる

さらにその先を進んで右の通りに行けば、“国立科学博物館”がある。千九百四十九年に設置されて以来、六十年経った今でもその存在感は大きい

シロナガスクジラの等身大の模型は圧倒的なのはご存知だろうか

国立科学博物館の近くに、“恩賜上野動物園”がある

通称“上野動物園”は数々の希少種を始め、約五百種類の動物を飼育している。上野恩賜公園の最大の利用目的となる動物園である

上野動物園は何が有名かと言えば、千九百三十六年に実際に起きた黒ヒヨウ脱走事件がある。排水溝に隠れていたところを捕獲され、無事に収まったが、この事件は阿部定事件、二・二六事件と合わせて“昭和十一年の三大事件”と称されるようになったのはあまりにも有名な話である

もう一つ言うとしたら、日本初のジャイアントパンダの導入だろうか。ジャイアントパンダのリンリンが二千八年に、慢性心不全で永眠したことは多くの人を悲しませた

ここまで上野駅周辺について説明をして来たが、理解して頂けただろうか

話を戻すでしょう

孝介は駅前の公園の木の下のベンチに腰掛けている一人の中年男に

近づいた

黄土色のジャケットをきて、一見刑事のようにも見える。元犯罪課の警部を勤めていた叔父からしたらそう見られるのも当たり前だそうだ

その格好も当時の叔父のシンボルのようなものだった

“最も警部らしい警部”

叔父は周りの人からそう言われていた

もちろん格好や仕草など、顔も含めてのことである

叔父、おとなしたくろつ音無拓郎は孝介に気がつくとき小さく笑って立ち上がった

拓郎は今は亡き父の兄だ。朗らかな、温厚な性格をしているため、警部だったころから周りの人間に慕われていた

孝介が本格的に仕事を探さなければならないと、孝介が入院しているときにお見舞いに来てくれたときに知った。そんな彼は面倒見のいい性格もしているため、現在営む探偵の事務所の調査員としてやらないかと誘ってくれた

ほとんど拓郎の助手として孝介は働いている。主な仕事は、今日のように拓郎の下について同行し、その一部始終を全て報告書に書き込む

字が人並み以上に綺麗なため、拓郎に抜擢されたのだ

拓郎は孝介に近寄った

「おう。やっと来たか」

孝介はそう言われて腕もとの時計に目をやる

「……八時十分前……叔父さんが早いんだよ」

「バカ。無理を通して会いに行くんだ。こっちが遅刻したら失礼だろ」

その通りである

が、拓郎の経験に寄れば相手は必ず時間通りには来ないという

もちろんそれは今回のように相手に無理を通して会合を約束した場合に限る

最後の最後まで直前まで迷うのだという。依頼者に対して罪悪感を感じるのが、対象者にとって一番苦痛だという

孝介と拓郎は駅前のカフェに出向いた

そこに入ると、上品なコーヒー豆の香りが漂う。仕込みをしている最中の髭の生やした拓郎より年上らしき男が二人の姿を見ると微笑んできた。「いらっしやい」と声をかけてくる

おそらくそれはこの店のマスターだろう。孝介は店内を見渡した……が、やはり対象者の姿はない

中年の女性が二人、若い女性が一人だった。対象者は若い男性と聞いている

拓郎もそれがわかっていて、男に人と待ち合わせていることを告げた。やけに親しげに話すな、と孝介は思っていた。それから窓側の前から三番目の席に座った

「何か飲むか？」

「これも経費？」

「馬鹿。自己負担だ」

孝介と拓郎はホットのブレンドコーヒーを注文した。それから店内を再び見渡して見る。中々洒落た店である

「いい店だろ？」

拓郎が孝介にそう言ってきた

「俺が刑事時代によく来てた店だ」

「どつりで……」

やけに店のマスターと親しげに話すなと孝介は納得していた

拓郎が警部という仕事を辞退したのには、妻を亡くしたという理由があった

今から五年前、孝介の叔母に当たる、和子が病気のためにこの世を去った。あまりにも唐突な急死だった。自宅で突然倒れているのを、隣人が回覧板を渡しに来たときに発見したらしい。死因は脳卒中だった

最愛の妻を亡くした拓郎のショックは大きかった。その数年前も、弟である孝介の父までもを失っていたのだ

しばらく精神状態がまともではなく、一人で閉じこもる生活が続いた。酒に溺れ、毎日のように死を嘆く。それがどんなに無駄なことなのか、当人が一番分かっていた

当時警部だった拓郎は職を辞退し、それからしばらくして和子の保険金もあったため、ずっと使われてなかった元建設業事務所を借りて、今の探偵業を営み始めた

“音無探偵社”の看板を上げたのは、今から二年前である

拓郎が何故、探偵業を始めたのかは理由がある。その本質が拓郎の定めている事務所のルールである

受ける依頼は……探し物だけである。

探偵と言えば他にも色々あるだろう。人探しや物探し以外に、離婚調査、ある人物の身边調査など……だが、拓郎はそのような依頼は

断り続けている

離婚調査や身辺調査のような、ドロドロと濁った世界には足を踏み入れたくない。それが彼が探偵をしていく上での決まり事だという

拓郎は世間の温もりを欲している。連続に続いた悲劇の冷たさを、世間の温もりで暖めて行きたいのだ

人探しや物探しだけを受け入れるとはそういう意味である

突然行方不明になった人、物。それを心から心配し、依頼者として事務所を尋ねてくる。その仕事に関わっていくと、人の心の暖かさ、絆、思い出、優しさに触れることが出来る

だから彼の“音無探偵事務局”は、もう一方の呼び名で“探し物探偵”と呼ばれる

“最も警部らしい警部”だった人間が生き方を変えて“探し物探偵”として生きている

孝介が拓郎の助手を引き受けたのも、実はそういうところに理由があったのかもしれない

夢に破れ、ミュージシャンとして生きる道はもう絶たれた孝介にはこの先どうして生きようかが分からないでいた

拓郎のように生き方を変えて今を生きようとする人間の心の強さを見たい

もちろん、この先ずっと叔父の下で世話になるわけには行かず、い

つかは独立し、孝介も社会の歯車の一部として働かなければならぬのだ

そのためにはまず何をすべきか、叔父の下につき先ほど述べたようなものを見習うべきだと考えた。孝介の性格というより性質、考慮深さがよく出ている

第10話

喫茶店に一人の客が入ってきた。その男性は店内をやたら気にしている。帽子を深々と被り、黒いジャケットを着ている。そして顎には無精髭を生やしている

拓郎は立ち上がると、その男を呼びかける。男は拓郎に気がつくといそいそと拓郎の元へ近寄る

拓郎はその男に愛嬌良く笑顔を見せて、ゆっくりとお辞儀をした。孝介も素早く立ち上がり、お辞儀をする。男の方は拳動不審である。慌てた素振りを見せ、お辞儀を仕返した

「佐々木、博也さんですね？」

「……はい」

「初めまして。音無探偵社の事務長を勤めております、音無です。今日はどうもお忙しいところに来てもらい、ありがとうございます」

「……いえ……こちらこそ……」

男は細々と喋る。まるで何か悪いことをしているような気にさせられる

拓郎、孝介はその男と向かうようにして座った

「こちらは助手の音無孝介。私の甥でありまして、調査員であり私の助手をしております」

「どうも」

孝介は深々とお辞儀をすると、佐々木博也は小さく頷いた

佐々木博也、今回の対象者である

拓郎の助手に就いてから、何度かこういう仕事をしてきたが……依頼の対象者というのは決まってこのような感じなのだ

「今回の件につきましては……音無さんには迷惑をかけてしまって……」

「それが私たちの仕事です。そんなに固くならないで下さいよ。取り調べじゃないんですから」

拓郎は気さくに笑った。冗談めかして言っただつもりだろうが、元警部の拓郎が言っても冗談に聞こえないと孝介は思っていた

「博也さん、今回私たちはあなたのお母さん。富美さんからあなたの行方を搜索するよう依頼を受けました」

「……母が……」

「はい。十二年前、あなたは家に手紙を残した後家を飛び出し、十二年間全く連絡の一つも寄越さなかった。富美さんはあなたを心配しております」

「……………」

「……私たちは知っています。あなたが家を出た理由を。しかし、話してもらえませんか？あなたの口から」

拓郎がそう言いながら鞆の中から取り出したのは、古いテープレコーダーだ。これは拓郎が刑事時代のときに、取り調べの際に使っていたものである

ますます取り調べらしくなってきたぞ、と孝介は密かに心の中でにやけていた

孝介はそんなことを思いながら、自分も鞆の中からメモ帳とボールペンを取り出した

孝介の仕事はこのメモ帳に対象者の話を明確に書き留めることである。そのメモを元に報告書を作成していくのだ。ここからは集中してかなければならない

拓郎はテープレコーダーの録音ボタンを押した。それとほぼ同時に、佐々木博也が重い口を開いた

「……俺、二年前まで俳優を目指していたんです」

佐々木博也。三十二歳。神奈川県横須賀市出身。県立K高校を卒業後、進学はせず地元の芸能プロダクションのオーディションを受ける

しかし上手く行かず、その二年後家から通帳とキャッシュカードを持ち出し、家を飛び出す

その後上京。ここ上野駅近くのアパートを借り一人暮らしを始めた
上京したのには理由があった。東京の芸能プロダクションのオーディ
ションを受けるためであった

中学のころから夢であった俳優になるために……

彼がオーディションを受けた芸能プロダクションは、“東映アカデ
ミー”と呼ばれる、東映株式会社東京撮影所の一部門だ。俳優、声
優、小役が所属し、また養成所でもある

1994年に東映演技研修所と東映児童研修所が合併し現在の形に
至る。東京都練馬区東大泉に所在する

彼は確かに二年前までそこに所属し、俳優人生を送っていた

「俳優と言っても……全然それらしきものじゃあなかったんですけ
どね……CMやドラマのエキストラとか、小さな舞台の演出とか……
…そんなんばつかで」

「皆、そういうところから始めていくものです」

「……果たしてそうでしょうか」

彼は寂しく笑って呟いた

自分には才能がなかった、と彼はそう続けた

「東映アカデミーに所属して十年……毎日毎日養成所で演技の訓練

をしてきました。しかし……いくら頑張っても、私には出番が回って来なかった」

それでも諦めたくなかった。いつか自分の演技を認めてもらえると信じていた

「でもね、ある日分かったんですよ。どんなに頑張っても、落ちこぼれるやつは……所詮は落ちこぼれなんだってこと」

今から三年前だと言う。彼の所属する東映アカデミーにある若い男性が入ってきた。彼は佐々木博也と十歳年の離れた新人だという

当時十九歳の若造は期待の新人として部内でも一目置かれる存在であった

しかしその若者の演技力は、確かに一際輝くものだった。同じ俳優を目指している者にしか分からぬ、圧倒的な演技力

彼の独自の世界に引き込まれて、魅力されてしまう

そんな彼はわずか一年の間に、着々とその地位を高めていった

次々と仕事が舞い込んできて、多くの舞台、CM、そしてドラマや映画にも出演した。その役というのも、かなり重要性の高い役であり、当然支払われるギャラも高い。彼はそれだけではなく、数々のテレビ番組からオファーが来ている

「すごいでしょ？一年ですよ。たった一年……私など十年間頑張っても、エキストラとしてしか出れないのに……今度彼が主演のドラ

マが始まるらしいですよ。ハハ……」

彼は目を伏せていた。目の下に光る涙を孝介は見た。書き留めるペンの動きが止まってしまふ……胸の奥に嫌な感覚を覚えてしまふのだ

何故だろうか……この男の話を聞いていると、深く共感出来る部分がある。そう、それが苦しい……

彼に共感してしまう自分の感性が酷く苦しい……

孝介は彼の姿が見ていられなくなり、思わず目を背けた

第11話（前書き）

更新遅くなってしまつてごめんなさい汗

最近何かと忙しくて……

それと、このSing With Songsに出すための自作歌詞を作成していました。あまり良い出来ではないかもしれませんが、気に入ってもらえると嬉しいです。

感想や評価があまり来ない状況で寂しい思いをしている健です……感想だけでもいいので、もしよろしかったらしてください。待ってます……

報告！

グッラブ！3についての情報を活動報告の方に書き込んでおきますので、これまでグッラブ！シリーズをお読みになった方はご覧ください

第11話

喫茶店を出ると、再び騒音にまみれた道に飛び出した。孝介は浮かない顔で空を見上げる。まだ拓郎の助手に就いて日は浅いと言えるが、今日ほど嫌な場所に立ち会うことはないだろう

それくらい今日の彼の話を聞いて孝介は複雑な想いにさせられた

中で会計を済まして出て来た拓郎に肩を叩かれる。孝介は振り向いて見ると、拓郎は歯がゆい表情をしていた

「行くか」

孝介は静かに頷き、ゆつくりと歩き出した。上野駅に向かって歩いている途中に、拓郎が口を開いて言ってきた

「……佐々木博也は——」

拓郎が次に何を言うのか分かっていた。それでも孝介は拓郎の言葉に耳を傾けた

「今のお前と同じだな」

孝介は答えず目を伏せた。その通り、佐々木博也は……今の孝介と同じだ。孝介も同じく夢に破れ、目の前の現実には打ちひれ伏している、一人の敗北者だ……

彼に共感してしまったのは、無論そこに関係していたと言わざるを得ない

孝介と彼は同じなのだ

才能無き人間がどんなに頑張っても、所詮落ちこぼれは落ちこぼれ……

分かっていたことだが、他人の口からそれを聞くと自分がいかに愚かだったのかを再確認にさせられ、残るのは雪辱な思いだった

孝介は五年近く、ましては彼はその倍を努力した人間だ……

孝介は静かに目を伏せて、佐々木博也のことを思い出していた

「アカデミーも辞めて、俳優の夢は諦めました。今は日雇いのバイトをして……生活をなんとかやりくりしてます」

彼はそう言っつて物恥ずかしそうに笑った

「それでも私は、もしかすると本当はまだ諦めたくなかったのかも
しれません」

「……と、いうと？」

拓郎は静かに聞いた。佐々木博也は小さく笑って答えた

「もし完全に諦めているのであれば、私は恐らく……すぐに母に連絡をし、実家に帰ってたでしょう。しかしそれをしなかったのは……」

「なるほど……」

「でも今日で踏ん切りがきました。いつまでも母に心配をかけているわけには行きませんので、しばらくしたら実家に帰り一からやり直そうと思います」

「そうですか」

「とりあえず、大検を受けようかと思っています。この御時世ですから、就職するには今のままでは厳しいんで……」

佐々木博也は別れる際に、拓郎と孝介を見て何度も何度もお辞儀をしてきた。その表情は初めとは異なり、晴れやかで良い顔をしていた。そのことが孝介をさらに苦しめていた。彼の嬉しそうな笑顔が頭の髓まで染み付いてしまったように、離れないのだ

「今回の依頼は……俺にとっても一番苦痛なものだったかもしれない

な」

「……叔父さんも？」

「ああ、一人の若者の人生の別れ目に立ち合ったんだ」

拓郎は深く息を吐いて、齒がゆい表情を浮かべていた

「才能……か……」

そう寂しく呟く叔父を孝介は見つめた

「努力してきて報われなかった人ほど、惨めなもんはないな……」

孝介はその言葉を聞いて、何も言い返すことが出来なかった。先ほどから拓郎の言葉が酷く胸に突き刺さる。佐々木博也の姿を今の自分と重ねてしまうことが、今の孝介にとって何よりも苦痛なことだった

拓郎と孝介は事務所に帰り、新たな依頼も来ることなくただ刻々と時間を過ぎるのを待っていた

事務所に戻ってから、孝介は早速メモを元に報告書を書き上げてい

った。これらを全て作成し、元の依頼人である佐々木博也の母親に検討してもらい、それらを踏まえた上で今回の調査費用プラス依頼料を頂く

その前に当然だが、拓郎に目を通してもらわなければならない

ということ、孝介は書き上げた報告書を手に持ちため息を吐いた。自分の目で何度か確認をしてから、立ち上がって拓郎の元へ歩み寄る

「叔父さん、出来たよ」

「ん」

拓郎は報告書を受け取ると、それに目を通し始めた

「……うん。いいだろう。ご苦労様」

孝介は再、ため息を吐き出した。これまでにいくつも指摘され続けてきて、何度も直してきた。しかし今日は一発オツケーをもらった。どうやらようやくこの仕事にも慣れてきたようだ

「じゃあ……俺、帰るよ」

「え？もう帰るのか？」

時刻は五時を過ぎていた。孝介は自分の席に戻り、荷物をまとめながら言った

「ああ。今日ちょっと用事があるんだ」

「用事？」

「人と会う約束してんの。悪いけど、今日は帰らせてもらっね」

荷物をまとめ、鞆を持ち孝介は再び拓郎の前に立った

「何だ、そうなのか。せつかく今日依頼達成の祝いに飲みに行こうかと考えてたのに」

拓郎は渋々、残念そうな表情で孝介を見た。孝介は拓郎に小さく笑みを見せた

「悪いね。また今度行くよ。佐々木富美は、いつ報告書取りに来るんだっけ？」

佐々木富美というのは、今回の依頼人であった佐々木博也の実母である。報告書を取りに来るときには、その概要を拓郎と共に説明するの孝介の仕事の一つである

「えっとちよつと待てよ……来週の……火曜だな。三時半だ」

「分かった」

「おう。もう一件の依頼に関してなんだが、仁美くんが中々手こずってるらしい。明後日の午前中、彼女といっしょに調査の方頼むよ」

「ああ……あっちの方が。分かったよ」

孝介は了解して、スケジュール帳にそれらの事柄を書き加えた

明後日、宗方^{むなかたひとみ}仁美と午前中調査。来週の火曜日に依頼人佐々木富美が報告書を取りに来る

孝介は確認をすると、時間をチラリと見る。そして少し急ぎ足で音無探偵社を後にした

第12話

家に着いたのは時刻が六時近くになっていた。孝介は小さくため息を吐いて、チエックの入った上着を脱いでハンガーにかけるとクローゼットの中にしまった

それから自分の体臭を気にするように、周りを嗅いでみる。ホテルを出る前にもシャワーを浴びず、佐々木博也と会い、そのままずっと事務所で報告書を書いていた

シャワーを浴びる時間すらなかったのだ。ホテルを出るときに、以前陽子からもらったBVLGARIのコロンをつけていったから匂いはなんとかごまかしていた

まだ微かにコロンの香りがするが、少し汗臭い自分に気がついた。彼女との行為をする前にシャワーを浴びてから何もしてないのだから当然と言えば当然だ

シャワーを浴びておこう。孝介はそう思い立って、浴室に向かうことにした

約半日振りにシャワーを浴びて、孝介はさっぱりと爽快な気分浸

っていた。水気というのは人に爽快感を与えるものかもしれない
タオルで髪の毛を乾かしながら、部屋に落ちている雑誌などを拾っ
てそれらを積んで片しておく。これらの作業を行いながら、孝介は
やたら時間を気にしていた

これから人に会う、それはこの孝介宅に友人がやってくるというこ
とを意味する

そいつがもう間もなく、予定通りではそろそろのはずなのである。
今の内に片付けられるところだけ片付けておこう

それにこれから来るやつはそんなに気を遣うようなやつじゃない。
むしろ気を遣うようなら孝介はそんな人間を家に招かない

最も今回はあちらの方が連絡してきたのだけど……

孝介は部屋を片している途中にふと今日のことが頭に浮かんだ

佐々木博也の件については、自分と重ねてしまうところがあるせいか
家に帰るまでの道中も思い出していた

拓郎が感じ取るように、佐々木博也の現状はまさに孝介そのもので
あった

夢を捨てきれず、けれども追い切れず、挫折を味わい……それでも
立ち上がろうと足掻いて見せる

才無き人間の惨めな抵抗……そしてその結果を表しているのが佐々
木博也……そんな彼と重ねてしまう自分……

つまり自分もそういう部類の人間であつたということだ……

分かつてはいた。それを認めて、素直に受け入れようと思った。だが、孝介にも自尊心はある

それでもどこか人とは違うのだと思っていたかった。人とは違うのだ自分は、と……

しかし自分はそういう人間の一部でしか過ぎない。例えば世間に動かされてる歯車のように、孝介も一定のリズムで動かされている一部の部品の一つに過ぎなかったのかもしれない

止めよう……そういうことを考える必要は……もうないのだ。既に自分は夢を捨てている。そして新しい道を切り拓こうと考えて、現状拓郎の下にいるのだ

答えならゆつくり導き出せばいい……

『お兄ちゃん』

ドクンと一つ、心臓が高鳴った。そのときだった

インターホンが鳴り、孝介はびくつと体を寄せた。止まっていた手

の動きが元に戻って、ドアの方を見る

そして時間を見た。そろそろ来るだろうと思っていた

孝介はゆっくりと立ち上がって、ドアの方へと歩き出した。そしてドアを開けると、そこには見慣れた顔が立っていた

「よう。来たぞ」

「ああ。いらつしやい」

さなだかずとし
真田和寿は軽い声で、おじやしますと言うと玄関の中に入った。そして孝介はドアを閉めると、カズを部屋の中へと入れた

「久しぶりだな。元気だったか？」

孝介はそう言いながら、せっせと部屋を再び片し始める。最近あまりこの家に帰っておらず、事務所の方で寝泊まりする日々が続いたから、片づいてなかったのだ

「悪いな。全然片づいてなくって」

「いや、そんなに気遣うなよ。でも珍しいな。お前が散らかしてるなんて」

「最近ろくに帰ってなかったんだ」

「探偵の方か？忙しいんだな」

「そこそこな。適当に座ってくれよ。今卓袱台出すから」

「あ、俺やるよ。あと、ほら買って来たぜ？」

と言つて、カズは孝介に手に持っている袋の中身を見せた。高級感溢れる日本製の酒だった。孝介は丁寧なそれを受け取り、どういうものか見てみた

「……蒸留酒か」

「おう。結構値張ったぜ？」

「ああ。美味そうだ。早くありつきたいな」

「最近暑くなってきたしなア。ちよつと蒸してるな、この部屋。窓開けていいか？」

「ああ。そうしてくれ」

カズは孝介にそう言われると、窓の施錠を開けてゆつくりと開いた。心地よい新鮮な風が入り込み、水気を帯びている孝介に涼しさを齎した

まだまだエアコンは必要ないだろう

「シャワー浴びてたんだな」

「ん？ああ。さっき帰ってきたばっかなんだ。報告書を書くのに時間がかかってさ」

孝介はそう言いながら、コップを二個、台所からとって冷蔵庫の氷

を入れる。そしてその内の一つをカズに手渡した

「探偵業、頑張ってるんだな」

「まアな。叔父さんにもお世話になってるから。その分しっかり働こうと思ってるな……当然だ」

「ふうん……そっか」

「あ、そうだ。寿司でもとるか」

孝介がそう言うと、カズが少し含み笑いを浮かべて遠慮がちに言った

「え？いいよ。悪いってそんなの」

「構うなよ。せっかく久しぶりに会ったんだから」

孝介はそう言いながら、付近にある寿司屋の広告を手に持ち、電話機の方に手を伸ばした

第13話

時刻は九時過ぎになっていた。孝介の部屋の中は二人の笑い声が響いていた

既に二人はすっかり酒が入ってしまっていて、出前で取った寿司がそろそろ無くなりかけていた

それでも酒があるから、会話は弾み、気分は心地良くなる。そう感じているということは、孝介はすっかり酔ってしまっているということだった

「アツハハハハ。そっか、弘樹ひろきのやつ、また女に振られたか」

「ああ。これであいつ、コンパ五回連続失敗。あいつもよくやるよな」

「目標が高すぎんだよ、あいつは」

「かもな。そんで俺はいつつもあるのヤケ酒に付き合わされんだよな」

「結構なことじゃなか」

「他人事だと思って……」

「亮太りょうたは？あいつも元気でやってる？」

「亮太？ああ。でも仕事がなかなか決まらないらしいよ。今はフリーター生活」

「ふうくん……そっか……」

「あいつは結構続いてるらしいぜ？」

「へエ……真紀^{まき}ちゃんとか？大学の人に知り合ってからずっとだろ？すごいな。あいつめちゃくちゃ誠実だからなあ」

「でも歯がゆいだろうぜ？」

「何で？」

「何でって、真紀^{まき}ちゃんはまだ就職して立派な社会人になってんだぜ？歯がゆいどころか気まずいだろう」

「あア……こりや時間の問題かな」

「かもな。だからあいつ相当焦ってるわけ。真紀^{まき}ちゃんを手放したくないらしい」

「結婚とか考えてんのか」

「今はそこまで考える余裕なんてないだろうけど……でもやっぱりしたいとは思ってんじゃないか？」

「ふうくん……フリーターじゃ格好つかないもんな」

「まず結婚式が挙げられないだろ」

「言えてる」

孝介たちは笑い合ってから一息ついた。孝介は再びコップに酒をつぎながら感慨深く呟いた

「みんな……色々と頑張ってたんだな」

「うん……」

カズも酒を口にしながら小さく頷いた

「……そついや、足は大丈夫なのか？」

「ん？あア、もうすっかり。何ともないよ」

「そつか。でも運が良かったな。足一本で済むなんて」

「まったくだ」

孝介は遡ること今から二ヶ月とちょっと前、無事右足の複雑骨折の手術を受けてから何日間が経って無事退院した

それでももちろん治ることはなく、しばらく松葉杖の世話になることになった

足が完治するのには時間が経ったが、歩くのにはさほど労力はいらなかった

ただ階段や段差を登るときには苦勞した

そして孝介はそのことを思い出すと、ついでなのかは分からないが入院していた時期を思い出す

酒を口に運びながら、頭の中に浮かぶのはある一人の少年である

音楽の才に満ち溢れていた、しかし重い病気を患っている少年……
奏は今どうしているだろうか

奏からの誘いを断つてから、孝介は特に奏と話をすることはなかった。検査や手術のことで孝介自身も忙しかったのもあるが、お互いに話を交わそうとしなかったところが大きな要因だろう

けれど孝介の方は少し違ったのかもしれない。今日のように、先ほどのように頭の片隅に奏がいた

奏のこと、言葉をふと思い出してしまっ自分

あいつの誘いはきっぱり断ったはずなのに、それでもあいつのことを気にかけている。それは何を意味しているのか……

被ってしまうことは、佐々木博也が言っていた言葉……結局自分は今の今まで、夢を諦め切れていなかった

どんなに虚勢を張っても、諦めたと言葉で口にしても、諦めたくない、まだ続けたいという気持ちが残っているがために、彼のように当てる先もないのに東京に居残るような行動に移る

自分はどうかだろうか……彼ほどまでとは言わないが……もしかすると……

「探偵の方はどうだ？」

「ん？」

カズにそう聞かれて、孝介は不意に聞き返してしまった

「探偵だよ。仕事上手くいつてるか？」

「あ、ああ……その話か。まあな。最近依頼が立て続けにあったさ。今日も一つ依頼が済んだんだが、また一つ入っててな」

「ふうん」

「人探しはさほど大変じゃないけど、物探しは難航するんだ、いつも。手がかりが少ない中、特定された物を探し出すって言うのには中々骨を折る」

「そうだよな。大きい物ならとにかく、小さい物なんか……」

「叔父さんが言うには、前に指輪の依頼があったらしいよ」

「指輪っ！」

「未亡人の亡くなった夫からの結婚指輪だつてさ。三カラットのダイヤ付きのたっかい指輪」

「そりゃ何としても探したいな」

「ああ。でもその時運が良かったのかどうか……吉祥寺の近くのフアーストフード店に届けられてたんだ」

「へえ……誰かが拾ってくれたんだ」

「みたい。未亡人、めちゃくちや喜んで涙を流して感謝してきたって。経費の倍近く払おうとしたらしいよ」

「世の中まだまだ捨てたもんじゃないな」

「本当だよな。三カラットの指輪が落ちてて普通届けるか？俺だったらネコババするよ」

「質屋に売る？」

「いや、いざ結婚するってときのためにとっとく」

「何だよそれ」

二人は再び小さく笑い合った。孝介は中に入った酒を少し口に入れた

「……今日の依頼は……つらかったなア……」

「え？」

「佐々木博也。今日見つかったんだよ」

「あ……ああ。前言ってたやつ？見つかったんだ」

「あア」

「つらかったって、何で？」

孝介はしばらく答えず、代わりに窓の外を見る。近くに線路が通っていて、さっきから電車の走る音が響いている。その環境の悪さがあるからこそ、このアパートの家賃は安いのだ

「……夢に破れた落ちこぼれだったよ……」

「え？」

孝介はカズに佐々木博也のことを話した。佐々木博也がこれまでに体験してきたこと、その境遇が今の自分と重なること……少しずつ話して行くと、カズも話の概要がわかってきて、徐々に声のトーンを落としていく

「……なるほどな」

「うん……」

孝介は再び小さく酒を飲む。するとだった

「悪かったな……」

「え？」

カズが沈んだ顔つきで孝介につぶやくように言ってきた

「あのとき、俺があんなこと言い出したから……一番頑張ってたお前が怒るのも無理はなかった……本当に悪かったな」

「よせよ」

孝介は笑ってそう答えた

「もう済んだことだぜ？それに今ではむしろお前に感謝してるよ」

孝介はそう言って笑いながら、また窓の遠くを見つめた

あの日、孝介たち“fingers”が解散することになったきっかけを言い出したのは、紛れもなくカズである

カズは現在金融会社に勤めている。“fingers”がまだ存在していた頃に、カズは先のことを見据えて孝介たちに何も言わずに就活を進めていたらしい

そして金融会社に就職が決まると、カズはすぐに解散の決意を促してきた

当時孝介は、まだ夢を諦めることを知らなかった。そのためか、孝介はカズの言い出したことを最初は理解することが出来ず……さらにはそれを理解した瞬間、カズに対して激しい憎しみを抱いていた。憎しみだ。怒りではなかった。体が瞬時にカズに殴りかかっていた。周りの二人に止められていなかったら、カズのことを病院送りにしてたかもしれない。

頭が冷めてから、虚無感に襲われた。夢がついに終わったのだと、徐々に自覚していく自分がたまらなく嫌だった。

そこで事故に逢った

「お前があの日、解散のきっかけを言い出してくれたから、俺らはようやく前に進めたんだ。じゃなきゃ今頃、佐々木博也みたいになりかねないよ。だから気にするなよ」

「……………」

カズは何も言い返さず、孝介を見つめていた。酒を飲みながら、そう言う孝介を見てカズは何かを感じ取っていたのである。

それからしばらくして、カズは残っていた酒を一気に飲み干した。

「……孝介」

「ん？」

「まだ、ギターはあるのか？」

カズがそう言ってきた、孝介は小さく笑った

「え？いや、事故のときにぶっ壊れた」

「学生の時に使ってたやつはあるんだろ？」

「それはあるけど……何で？」

孝介が不思議そうに尋ねると、カズは澄んだ目で孝介に言った

「聴かせろよ」

「え？」

「お前の歌。もう一回聞きたくなった」

孝介はしばらく啞然としていた。それから小さく笑った

「カズ……酔ってんな。お前」

「いいから。ほれ、早くっ」

カズは立ち上がって、孝介をそれをさせるように促して、立ち上がらせようとしてきた

孝介は笑いながら仕方ないと押し入れの中にしまってたギターを探した

孝介も何故か、全く嫌な気分にはならなかった。どうやら飲み過ぎたらしい

孝介は押し入れからケースにも入れてない埃被ったアコースティックギターを取り出した。ベージュ色の至ってシンプルのアコースティックギター。弦は錆び付いてしまっているし、チューニングはバラバラだ

「弦が酷いな……」

孝介はおかしそうに笑った。こんな風に完全に錆び付いてしまっは、チューニングしているときに必ず切れてしまう

「久々に変えるか」

弦を張り替えて、チューニング、つまり音も合わせた。ピックを持ち、あぐらをかいてギターを持ち、一弦一弦、丁寧に弾いていく

「いい音だ」

孝介は呟いた

「ギターの音は澄んでいて気持ちいい」

本当そうだ。この心地よいクリーンな音色が、孝介は好きだった

「……何が聞きたい？」

カズに尋ねると、しばらくカズは考える素振りを見せた

「ん……お前に任せるよ」

「ん……じゃあ……」

孝介はボディを小さく叩いてリズムを取り、優しいメロディーを奏で始めた

イントロの部分だけでカズはそれが何の歌か分かってくれた

「『一日が始まる』か」

「今何となく歌いたいんだ」

朝目覚めると 柔らかな匂いが僕を包む

心地よい瞬間が 君の寝顔と共に

カーテンを開ければ 眩しすぎる朝日

薄ら目を開く君を見て 僕は小さく笑った

おはよう

おはよう

朝になったよ そろそろ起きようか

コーヒーでも飲むかい？

ブラックでもいいかい？

こんな風な日常にありがとう

空は赤く染まる 昼とは違った顔に変わる

世間体に合わせて それも一種の道徳

公園を通れば ベンチに居座る老人がいて

目を合わせたんだ 彼は優しく微笑んだ

こんばんわ

こんばんわ

今日もお勤めご苦労様です ええ ありがとう

今日が終わるよ

日が沈むのと共に

目の前の夕日に目を細くして笑うんだ

どんなに頑張ってみたって 何かが変わるわきゃないし

一週間経ったって
一年間経ったって
十年間経ったって

日は昇り 沈んでくんだ

一日の終わりには
飲みにも行きましょうか

今日は奢るよ だって先輩だもん

それもまた ありふれてる現実

おはよう

こんにちは

こんばんわ

心のこもった言葉って何だろう？

でも最後に言わせておくれ 自分にさ

今日もお疲れ様

おやすみなさい…

『一日が始まる』

by Kousuke Otonashi

第13話（後書き）

『一日が始まる』は、中川健司自作の歌詞でございます
喫茶店でコーヒーを飲みながら、行き交う会社員やOL、頑張つて
る人たちを見て、世間で頑張ってる彼らの思いをこの歌に込めてみ
ました

みんなにどう伝わったのか、そして気に入ってもらえれば嬉しいで
す♪

ちなみにメロディーもちゃんと考えてるんデスヨ（笑）

このように自作歌詞をどんどん乗せていきます

あと有名な曲もちよいと載せます……

この小説のテーマは「音楽」ですから（ ）○（ ）

これからもよろしく願いします（ ）（ ）（ ）

第14話

部屋の中は寝静まり返っていた。が、孝介は眠れずに片手にギターを抱いて窓の外を眺めていた

カズはすでに潰れてしまっている。酷い鼻を搔いて深い眠りへと落ちていく。孝介はそんなカズにすでに毛布をかけていた

孝介も眠ろうと試みた。しかし、眠ることが出来なかった……目を閉じると頭の中に流れてくるメロディー……結局あの後盛り上がったしまつて、何曲かギターを弾いて歌った

その光景がこうしているだけで思い浮かんできて、捨てたはずのメロディーが延々と流れている

そうしている内にすっかり目が覚めてしまい、孝介は今のようになっている

そして自分の中で気づき始めている。自分は間違いなく、佐々木博也と同類だ

そう、いくら頭の中で、夢を捨てた、あきらめたなんて言っても……それは虚勢に過ぎなかった。自分は今でも音楽を愛している

ギターを奏でて、歌を歌っているときの自分がいかに生き生きしているか、感じ取ってしまうのだ

音楽を続けたい……その気持ちがいかにあるのだ

だから、佐々木博也の姿が痛々しく思うのだ。それが辛く苦しいことだと感じてしまうのだ

奏は……今どうしてるのだろう

孝介は静かに目を閉じた……奏の音楽を思い出しているのだ。あの天に恵まれた素晴らしい音楽を……

そしてあいつの言葉を何故か思い出してしまう

『お兄ちゃん』

『僕の音楽をお兄ちゃんに全部あげる』

また一つ心臓が高鳴る。気づいてたら、手が震えていた。汗ばむ手。それは一体何を意味しているのだろうか……

孝介は自分の手を見つめた。左手。その指にはマメが出来ている。ギターをやっている者は、右利きの人間は左手に、左利きの人間には右手の四本の指、人差し指、中指、薬指、小指にマメが出来て皮が固くなる

何故かと言うと、ギターの弦を押さえるためである。アコースティックギターなどで分かるだろうが、弦の張りの強さは凄まじい。それをしっかり押さえるには、当然強い力が必要である

四本の指でコードを押さえるために、四本の指は最初マメが出来て徐々に皮が固くなるのだ

初心者がいきなりギターの弦を抑えられない理由は実はそこにある
皮が柔らかければ、しっかり押さえることが出来なくてかすれた音
しかでないのだ

無論、孝介の指はすでに固まっている。ゴツゴツとしているのはギ
タリストだったという証

奏の指も恐らく指は固いだろうな……

……自分はどうしてこんなにあいつのことを考えてしまうのだろう
か……

もう済んでしまったことなのに、決まったことなのに……

孝介の中では何も終わっていないのだろうか……

このまま自分は佐々木博也のような道を辿ることになるのだろうか
そうなるのが嫌だから、拓郎の元で新たな道を切り開こうとしてい
る。しかしそれは正しい選択と言えるのだろうか？

孝介は小さくため息を吐いた。とことん自分は弱い人間だ。本当に
やりたいことは何なのか、もう胸の中に秘めておくことは出来ない
だろう

今日ギターを弾かなければ、こんな思いに駆られなくてすんだのに
……胸の中に秘めさせておく方が幾分かマシである

孝介はギターのボディをゆっくりと撫でた。高校に入学すると同時

に親に買ってもらった初めてのアコースティックギター。最初はコードなんか上手く弾けずにいて、それでも懸命に弾けるようになって……

最初に弾けた曲は確か……

「……幼い微熱を下げられないまま……神様の影を恐れて……隠したナイフが似合わない僕を……おどけた歌で慰めた……」

スピッツの名曲“空も飛べるはず”だ……C、G、Amから始まるイントロ。ストローク（右手でとるテンポ）も単調でバレーコード（一つのフラットを人差し指で全て押さえるコード）はFしか出てこない。ギター初心者にとって一番基礎となる曲だ

「色褪せながら……ひび割れながら……輝くすべを求めて」

君と出会った奇跡がこの胸に溢れてる

きつと今は自由に空も飛べるはず
夢を濡らした涙が海原へ流れたら
ずっとそばで笑っていて欲しい

何度も初めてのアコースティックギターでこの“空も飛べるはず”を歌った。嬉しくって、つい夢中になってしまっ……

それから文化祭で軽音楽部で組んで演奏した初めての曲が……

Mr・Childrenの“終わりになき旅”

懐かしい……すごく好きだった曲だ……

今まで色んな曲をカバーで演奏してきて、大学に入ると自分で曲をつくるようになった

さっきの“一日が始まる”も、そのときに作った曲だ……

カズと共に作った……初めての曲で、何だか胸が躍った……

大学時代夢中になって色んな曲を作ってたけど、この“一日が始まる”が最高の出来だった

亮太、弘樹、カズとロックバンド“fingers”……全員で一つの手、一つの音楽という意味合いを込めた

一つ指が足りないと言ったな……

でも駄目だった……

“fingers”は世間に認めてもらうことは出来なかった……

夜が明けてきていることに気づいたのは、それからしばらくしてからだった

目の前から朝日が登ってきている。孝介は卓袱台の上の時計を見た。五時半を差している……

孝介は小さくため息をついた。昔も思い出すだけで、まったく一睡もしていない……

少し眠ろう……無理をしても……

孝介は窓をしめて、そこに寄りかかったまま、目を閉じた

しばらくすると浅い眠りについた

第15話

孝介は公園のベンチに居座って、煙草を吹かしては腕にしてある時計を何度か見るといふ動作を繰り返していた

今孝介は人を待っている。約束の時間だが、五分を過ぎている。そろそろ来るだろうと考えていた

無論孝介がこうして人を待つするには、ウキウキとした気分などはない。仕事の一つとして、人を待っているのだ

第一今は彼女など不必要である。ただでさえ自分の身に置かれている状況が不安定なのに、女と遊んでいる余裕など孝介にはない

目の前には噴水があつて、近くに住む人はこの噴水の前を待ち合わせ場所にする

現に孝介の周りには多くの待ち人を待っている人がいる。特に若い人が多い……若さは同じだが、孝介とは違って待っている人の待ち人とは、若々しい身振りをしたカップルである

ここの公園はそういうスポットなのだ……何故自分はこの場所で待たされているのだろう

もつと駅前の方、カフェなどでよかつたのに……

そんなことを考えていると、孝介の前に誰かが立ち止まった。孝介は煙草をくわえながら、その人を見上げるようにして見る。それこ

そが、孝介の待ち人であつた

「ごつめん、ごめん。待った？」

よこやまひとみ
横山仁美は顔の前に手を合わせて謝ってくる。孝介は彼女の顔を見ると、笑顔を作つて煙草の火を消した

「いえ。俺もさつき来たばかりですから」

仁美はそれを聞くとほっとため息をついた。まったく、彼女は孝介よりも年上のはずだが、いつもながらそんな風な感じには見えないが、そこが彼女のいいとも言える

仁美は孝介よりも五つ年上。身長は一般女性の平均身長でいうとやや低め。若気があつてちょっと活発的な女性である

今時風のロングヘアーにカールを巻いた栗色の髪。身振りや容姿は悪くないのに、残念ながら独身である

孝介は立ち上がつて、仁美に並んで歩き始めた。仁美の履くハイヒールの音がコツコツと耳を通る

「ゴメンねー。あたし一人じゃ荷が重くつて。捜査も難航してるの」

「いえ。佐々木博也の件も無事解決したんで。俺に手伝えることがあれば」

「ありがとう。佐々木博也見つかったんだ」

「叔父から聞いてませんか？」

「うん。最近事務所に帰ってなかったのよ」

「仁美さん、俺と真逆ですね」

そんなことを話しながら、現在仁美が関わっている依頼について詳しく聞いておくことにした

叔父からある程度は聞いているが、詳しくは聞いていなかったからだ
今回の依頼はまたもや人捜しらしい。二週間前にある男が音無探偵社を尋ねてきた

依頼人は孝介よりも、仁美よりも年上の男だった。依頼の内容は……

「恋人の行方を探して欲しいんですって」

仁美は公園内を歩きながら、そう言った

その男性の恋人が急に行方が分からなくなったという。とは言っても、何かしらの事件に巻き込まれたという訳ではなく、ある日その恋人がその男性にメールを送ったのだという

『ごめんなさい。さようなら』

それから彼女は彼に行き先も告げず、どこかに引越してしまったらしい

それから何日か経って何の手がかりも掴めず、ついに音無探偵社の門を叩いたという

「はあ……まるで恋愛ドラマですね」

「でしょ？本当にそんなことがあるんだなーって思ったわ」

「やっぱりその彼女がいなくなった理由っていうのもあるんですね？」

「うーん……まあ、彼が言うにはね……原因はプロポーズにあるんじゃないかって」

「プロポーズ？」

男性はその彼女がいなくなる前の数日前に彼女にプロポーズをしたらしい。ちゃんと指輪も買って、世にありふれた形のプロポーズを誠意をもってしたという

が……

「そのときの彼女、酷く困惑してたらしいわ」

「で……返事も返さぬまま失踪……ですか」

「そういうこと」

「辛いなあ、それ。でもそれって、答えはノーってことなんじゃないですかね？」

「うーん……でも何も言わないまま突然いなくなるっていうのは変

じゃない？もしかしたら何か事情があるのかもしれない」

「そうですね……彼も納得行きませんしね。えっと……ところで今捜査はどのくらいまで？それと今日はどこへ？」

孝介がそう聞くと、仁美は難しい顔を浮かべた

「それがてんで駄目。手がかりになると思えば、その先に繋がらないの」

「そうですか」

「でも、今日は違うのよ。彼女が利用したかもしれないっていう不動産屋が浮かんのだの」

「都内ですか？」

「もちろん。今日はそこらに行くのよ」

「一体いくつくらいが？」

「ええっと……二十件かしら……」

「……………」

今日は一日中歩きまわる羽目になりそうである

第16話

「そうですか……分かりました。お忙しいところ、ありがとうございます」

また一つ不動産屋に立ち寄ったが、はずれであった。どの不動産屋も、口を揃えて言うには……

身の覚えがないという……

孝介と仁美は深いため息を揃えてついた。そんなお互いを可笑しく思い、たった今はずれであった不動産屋を背にお互い笑い合った

「疲れてますね、仁美さん」

「孝介くんもね」

「そうですね。ここまで来てもはずればっかり。ましてはまだ半分だと思つと正直……」

「それが探偵つていう仕事よ。それにまだ半分じゃなくつて、もう半分つて思ふことが肝心なの。頑張りましょ」

やけに大人びた口調で孝介を宥めてくる。そんな普段とは違つ仁美に孝介は小さく笑つて見せた

「今日はやけに大人……ですね」

「それってどういう意味かしら？」

「いえ別に」

孝介は目を背けて苦笑した

「えっと……次はどこですか？」

「次はね……田島不動産屋ってところ。あら……今度は吉祥寺ですって」

「……今更ですけど、その彼女の行動範囲、もう少し絞るべきだと思っんですけど」

今、孝介たちは品川駅近くの不動産屋に来ていた。品川駅を利用して吉祥寺まで行くとしたら、また大きく時間を費やすことになる。品川から吉祥寺に行くのには、山手線を利用して新宿方面に出るしかない。それが最短ルートだが、それでも裕に三十分以上かかる。少し効率が悪いのではないだろうか？

「これでも充分絞ってるわよ」

「吉祥寺まで出るのに？」

「もう、孝介くんは分かかってないなあ」

仁美にそう言われるが、孝介には自覚がなく、自分の言っているところ非が分からなかった

「いい？今回の搜索は自分の意思で突然行方の分からなくなった、対象者なのよ？」

「それは分かってますけど……」

「自分の意思で行方をくらますのに、近場の不動産屋なんか使うと思う？簡単に足取りが掴まれちゃうじゃない？」

「それはそうですけど……でも搜索範囲が広ければ広い分、搜索は困難になりますよ？だったら、範囲を出来るだけ絞って……そっちの方が可能性としてはありません？」

「どんなに広かろうが、時間をかけようが、風漬しにやっていくしかないの。言っただでしょ？それも探偵の仕事よ」

仁美はそう言いながら、孝介を見てふと笑って見せた

「そっか。孝介くん、こんなに大掛かりな搜索は初めてだっけ？」

「ええ……ずっと叔父の傍で仕事してたもんですから。それも全部近場で」

孝介の言う通り、孝介は今までもずっと拓郎の助手としての仕事しかこなしてこなかった。それもこの間の上野駅のように事務所から近場の搜索である

こんな風に広範囲に、そしてアグレッシブに行う搜索活動は初めてで孝介には辛い仕事にしか思えなかったのである

「そつ。じゃあ覚えときなさい。探偵の仕事は生半可な物じゃない

ってこと」

仁美はちよつと悪戯気に笑うと、少し足を早くして歩き出した。孝介はそんな仁美の後ろ姿を見つめながら、小さく呟いた

「……やっぱり今日の仁美さん、大人です」

孝介は小さくため息をついて、空を見上げた。初夏になれば蒸し暑い日々が続く。今日は珍しく快晴だから、余計その蒸し暑さを感じる

一日中歩き回るのも精が出る。何かいい方法は……

「……仁美さん」

孝介は先を歩いて行く仁美を呼び止めた。仁美は足を止めて振り返って孝介を見る

「何？」

「手分けましょう」

「え？」

孝介はゆっくりと立ち止まっている仁美に近づいていった

「残りの不動産屋。手分けましょうって言ってるんです。その方が効率いいでしょ？」

孝介がそう言うのに、仁美は小さく笑った

「構わないけど……でも孝介くん場所分らないでしょ？」

「名前を覚えてくれれば探しますよ。メモりますから名前教えてください」

そう言いながら、ポケットの中に入れておいたメモ帳を取り出す。拓郎と対象者の話を聞くと共に、いつも使用するメモ帳。前回の佐々木博也の分が今でもすぐ昔のことだと物語る

「ふう……」

仁美と残りの部分を分けて、孝介は合計で5つの不動産屋に立ち寄った。が、結果は残念ながら全てはずれであった

もし当たりが出ればすぐにお互いの携帯電話に連絡するようにと、そう言つて二人は別れた。その携帯電話にはやはり仁美からの連絡はない

全てあてがはずれたか、それともまだ少し時間がかかるのか……いずれにしろ、今日の孝介の仕事は終焉に近づいていた

そして今、孝介は最初の待ち合わせた公園の中を歩いていた。ここで待ち合わせることにしているのだ。時刻は六時近くになっていて、

初夏のこの時期は日が沈みかけている時間帯である

孝介は夕日を見ながら歩いていた

最初は小さな芽生えだったのかもしれない、しかし間違いなく徐々に強まっていく孝介の中で巻き起こる葛藤……

いや、もしかしたら最初からあって孝介は気づかぬ振りをしていたのかもしれない

どちらにしても今考えるのは……

このまま終わってしまったて、それでいいのだろうか……

その思いだった

このまま佐々木博也と同じような、諦めたままでもいいのだろうか？
自分に言い聞かせたまま、その思いを閉じ込める。それで本当にいいのだろうか

孝介の中では今二つの道がある。一つはもちろん、このまま音楽を諦めて普通の人生を歩むこと

そしてもう一つは……もう一度夢を追いかけること

でもそれは、今より辛い現実と向き合っていく覚悟が必要である

自分にはその覚悟があるのか？可能性は秘められているのか？

自分で分かる。可能性はゼロである。どんなに頑張っても今更何も変わることはないだろう

また現実には打ち拉がれて、敗北を味わうことになるだろう

一人では……

奏……となら……？

噴水の近くに通るかかると、孝介はそこで立ち止まって一つの光景をじっと見つめた

それはギターを抱え、慣れた手つきでそれを奏で、自分の歌を世間に向けて放っている

一人の若い男……おそらく学生だろう

彼の姿を見ると、何だか昔の自分を思い出すようだった

自分もかつてこのように自分の歌を世間に向けて放っていた

今でも……やはりいるのか……

するとその学生らしき男は孝介と目を合わせた。手を止めて、孝介をじっと見つめる。するとにつこりと微笑んだ

「こんにちは」

突然挨拶をしてきたので、孝介は若干驚いた。しかししばらくしてから、小さく笑って頷き返した。すると学生は孝介にくっつくのな
い笑顔を向けながら言ってきた

「一曲、聞いてくれませんか？」

「え……」

彼からそんなことを言われて、孝介はどうしていいか分からなくなっていた。だがそう言われると、彼の歌に興味が湧いてくる。そして何よりかつての自分を見ているようだった

「じゃあ……聞いていこうかな」

そう言ってゆつくりと学生に歩み寄る。それから彼が歌う近くのベンチに座った

学生は嬉しそうな表情で、ギターのチューニングを合わせ始めた。そんな彼の姿を見ていると、余計に自分を思い出す

「君……学生？」

「はい。首都大の一年です」

「首都……大」

さらにフラッシュバックが重なる

「俺、この間キャンパスで初めて曲作っただ。それで嬉しくって、誰かに聞いてもらおうって思って」

「へえ……」

彼はギターを抱えて、弾く体制に入った。それから目を閉じて、アルペジオ（和音を重ねて弾く技法）から入るイントロを奏で始めた

第17話（前書き）

今回もまた自作歌詞を載せています

この曲で、誰かを励ましてたらいいなあといつも考えている作者です

第17話

「いい曲だ」

聞き終えた孝介は素直な感想を率直に告げた

学生にはいい曲だと孝介は思えた。無論、歌詞などにまだあどけなさが残るようだったけれど、それは言わないでおいた

彼は嬉しそうに顔をほころばせて、小さくお辞儀をした

「光栄です。ありがとうございます」

自分なんかの意見を素直に受け止めて喜んでくれている。孝介はそれだけで胸の中に空いた穴が少し埋まったような感覚を覚えた

あれから少し自暴自棄なところがあるせいかもしれない

そのとき、孝介のポケットに入れていた携帯がなった。少し驚いて、携帯を取り出してみる。すると画面には仁美からの着信と書いてある

すかさず孝介はボタンを押した

「はい」

『当たり前』

出るなりに電話から仁美の声がそう言った。孝介は胸の中に熱い感

覚を覚えた

「本当ですか？どこです？」

『中村不動産屋よ。彼女は確かにそこで、駅近くのアパートを探してた』

仁美から見せてもらった資料に、中村不動産屋の名はあった。孝介は少し驚いた。中村不動産屋は孝介も知っている。というのは、孝介のアパート近くの不動産屋で、実際孝介もアパートを借りる際にそこから紹介してもらったのだ

まさか……例の彼女は孝介のアパート近くにいるのだろうか……

「中村不動産屋は俺の家の近くです」

『そうなの』

「はい。俺もアパートをそこで紹介してもらいました」

『本当に？すごい偶然ね』

「これからどうします？」

仁美はしばらく考えたあと、小さくため息をついた

『とりあえず今日はここまでにして事務所に戻りましょう。拓郎さんに報告しなくちゃ。今私駅前にいるから、孝介くん悪いけどこっちに来てくれる？』

「了解しました」

孝介は電話を切ると、携帯をポケットの中にしまった。依頼解決の手口によりやく踏み出したという感じだ

孝介は目の前の彼に笑顔を作った

「素晴らしい曲。どうもありがとう。これから頑張ってくれ」

といいながら、財布を取り出して、曲を聞かせてくれたお礼のように手持ちにあつた分の三千円を取り出して彼に渡そうとした。しかし彼は逆に笑顔でそれを制した

「いりません」

「そういうわけにはいかないよ。こっちの気が済まない」

「いいんです。憧れの人からお金なんてもらえません」

孝介はその言葉を聞いて半ば驚きながら、解釈するのに困難の道を極めた。憧れの人とは一体どういうことだ？彼とは初対面だ。だから孝介にはまったく身の覚えがなかった

「音無さん……ですよね？」

「え？」

彼は自分の名前を知っている。何故……

「やっぱりそうだ。fingersのボーカルの音無さんでしょ」

「……fingersを知ってるのか？」

孝介は軽く興奮をしていた。あとは驚きを占めている。何故彼が……fingersを知っているんだ？

彼は嬉しそうに、孝介に羨望の眼差しを向けていた

「二年前……ショッピングモールの広場のライブを見ました」

「え……」

「今でも鮮明に覚えています。音無さんの歌声、そしてfingersの曲を……」

今から二年前……彼が高三のときに大学受験に苦しんでいた時期……

志望校の首都大を狙っていたが成績不振で思うように行かず、途方に暮れていたという

彼の両親は成績不振の彼を咎め、彼はそんな生活に嫌気が差していた

しばらく勉強から身を引くようになってしまった。すべてを投げやり中途半端に……もう何かもが嫌になっていたそんな時期だった

とあるショッピングモールに買い物をしていたとき、その広場で一つのミュージシャンに巡り会ったという

それが……孝介の率いるfingersだった……

「そのとき俺、正直あなたたちが羨ましかった。自分みたいに悩み
なんか抱えてなくて、好きなことを思いっきりやっている。そんな
姿が羨ましかったのと同時に、何だか腹が立って」

彼は照れくさそうに鼻先をポリポリと掻いた

「でも、そのときあなたの曲を聞きました」

いつにしたってさ

道なき道を歩き続けてきた今の僕です

いろんな物を踏み台にしては背伸びして手を伸ばしてた

あやふやな現実を目を背けて過ごすけど

そこからでも見えてきてしまっただろう

遙か彼方に落ち込む君が

一つ一つ昇るけど

一つ二つ下りていく自分がいて

ちっとも前に進むはずがなくて

だけど当たり前のように足掻いてる僕がいる

若き僕が大人への階段なら楽に昇ってるよ

けど空疎な物しか見えなくて

Ah 大した意味じゃないさ

ほら よく見てみなよ

新しいドアの向こうへ いざ行け

本当に僕は確かに成長してきたって言えるかな

意味など知らないから答えることなど出来やしないんだけど

いつだって人の言葉を頼りに歩いてきたけど

結局たどり着いた場所に立てば分かるんだ

そこがどこなのかを問いたです

一つ一つ歩くけど

一つ二つ下がってく自分がいて

ちつとも前に進めやしないなんて

叫び声を挙げる僕がいんだ

暗い闇の中で一筋の光を探すように

A h 自分の言葉だけを ほら その手で祈るように

新しいドアをノックするんだ 彼方へ

誰かと過ごしても

何を考えても

無垢な自分を追い詰めるだけだろう

嫌になることも

全て忘れればいい

なんて都合よく行くはずなくて…

一つ一つ昇るけど

一つ二つ下りていく自分がいて

ちつとも前に進むはずがなくて

弱虫なこんな僕に効く抗剤があればいい

なんて考えちまつてる始末で

一つ一つ歩くけど

一つ二つ下がっていく自分がいて

ちつとも前に進めやしないなんて

叫び声を挙げてる僕がいんだ A h

己自身を照らし示す道が ほら 目の前に

自分のために

新しいドアをノックして

新しい場所に立つ

それが僕の選んだ答えです

新しい何かを見つけに行こう

【果てしなき道】

確かにそれは孝介が作った曲だった。間違いなく、fingersの新曲が当時のそれだった……

「その曲を聞いたとき、俺本当に感動しました。まるで自分のための歌みたい……そんな錯覚を覚えるくらい……」

彼は思い出しながら小さく笑っていた。照れくさそうにだけど嬉しそうに……

その後彼はそのときその曲が収録されているCDをその場で勝って家に帰って何度も聞いた

そのCDはもちろん孝介たちfingersが自分たち自身で収録し、許可をもらって販売していたものだ……

何度も何度も聞いてくれたという。そしてその曲に後押しをしてもらうかのように、再び勉強に打ち込んだという

「俺もあなたたちみたいなお曲を作りたいんです。あなたたちみたいに、俺の歌で誰かの心を響かせるような……まだまだ未熟ですけど。」

だから俺の中であなたたちは俺の……憧れでもあつて目標でもあるんです」

彼はそう言つと、照れくさそうな笑顔を見せて孝介に向けて微笑んだ

第17話（後書き）

感想や評価メッセージをよろしく願います

第18話

「何だか嬉しそうだな」

事務所に戻って孝介は自分の席で資料を読み返しているときだった。拓郎のその言葉に孝介は思いの他、「えっ？」と間拔けた声を上げた

拓郎は煙草を吸いながら、パソコンを使ってキーボードを叩いてた。そんな拍子に突然言ってきたのだ

仁美は事務所に帰るなり、拓郎に「少し休むといい」と言われてソファーを使って眠りこけている

ここ最近例の彼女の手がかりを何としても掴もうと休む暇なく働いてたらしい

静かな寝息がスースーと聞こえる

「何が？」

孝介はそう言ってみるが、拓郎はお見通しだと言わんばかり煙草をくわえながら笑った

「隠すな。さっきから顔がにやけてるぞ」

そう言われて自分の顔を触ってみる。とてもそんなつもりはなかったのに……

「ようやく例の彼女への手がかりが見つかったから」

「ふーん……まあ、そういうことで済ましておくよ」

どうやら拓郎は本当に見通しているみたいだ。さすが、孝介の叔父というだけはある

拓郎は孝介が小さいときから面倒などよく見てもらった。孝介は山梨の甲府市に住んでいたけど、拓郎は刑事時代からここ東京に住んでいる

よく拓郎の元へ家族で訪問もしたし、その逆もあった

幼いころから叔父との関わりは深かった。そのためか、孝介の考えていることなど親も同然であるかのようにお見通しなのだ

孝介は小さくため息をついた。観念しよう……キーボードを叩いている拓郎に向けて言った

「……今日さ、公園である学生に会ったんだ」

孝介が話し始めたのと同時に、拓郎のキーボードを叩く手が止まる

「昔の俺みたいに、弾き語りをやってた。何だか昔を思い出すようで一曲聞いていったんだ」

「そうか……」

「俺だけじゃないんだなあって思ったよ。色々なやつが、やっぱり俺みたいに夢を追いかけてたんだなあって」

孝介は彼の曲を聞きながらそう思った。言ってみれば当然のことなのだが、何故か改めて新鮮なことにように感じてしまっていた

自分だけではない

色んな人間が、自分の夢を持って、それを信じて向かっているのだと気づいた

「でさ、その学生が夢を持ったきっかけが……俺たちの曲なんだって」

その意味を正確に理解した拓郎は「ほう」と声をあげた

「【果てしなき道】って言ってさ。二年前に俺ら確かに作った曲なんだ。それを、モール広場のライブで聞いてくれたらしい」

「よかったじゃないか」

「うん。正直……めちゃくちゃ嬉しかった」

孝介は小さく笑みを作って、ショーウィンドウの外を見た。既に真っ暗であるが、街中は明るい。目の前の通りを色々な人が通っている

この中に、どのくらい自分の夢を抱いて生きているのだろうか

「俺たちの曲で……誰かを支えていたんだなって。そんな人がいたんだあって……それが分かって、すごく嬉しかったんだ」

自分たちの曲で誰かを支えてあげられるような、そんなミュージシャ

ンになりたい

それが孝介の長年抱き続けていた夢であつた

自分たちの曲は世間には認めてもらえなかった。だが、身近にいる人間には自分たちの曲が届いていた。それを知れただけで、何ともいえない……胸の中に再び熱い感覚が蘇っていた

孝介の言葉に耳を傾けていた拓郎は小さくため息をついて、コーヒーカップを手に持った

「孝介」

拓郎に呼ばれて孝介は振り返る。拓郎が孝介に向ける目はとても優しい目だった

「お前は一つ勘違いをしている」

「え？」

「誰もが夢を諦める必要はないんだ」

拓郎は孝介にそう言うと、立ち上がった。孝介の隣に立ち、同じようにショーウィンドウを覗き込む

「大人になれば、お前が考えるように……生活のことや、経済面的こと、社会それにいつか結婚のことも考えるようになって、家庭を持ち、やりたいことを我慢しなければならなくなる」

「うん」

「でもな、我慢することと、諦めることは違うぞ」

「え……」

拓郎はにっと笑みを浮かべた

「お前は俺を見て違う生き方を選ぼうとしている……確かにそれもいい。だが、お前自身どうなんだ？」

「……俺は……」

「本当はまだ、捨てきれてないんじゃないか？」

拓郎の言葉に孝介は胸に熱いものを感じた。拓郎の言うとおりだ。結局どんなに自分に言い聞かせて、自分を殺したって、本当の思いは変わらない

それに気づきつつある自分がある。あの日カズとギターを弾きながら歌を歌った日から……

今日、少年の心に自分の歌が届いていたと分かった日……

いや、もっと前の出来事からだ。自分はまだ、夢を棄てきれずにいるのだ

あのときと同じような気持ちで、自分の胸の中に沸き起こっているギターに初めて触れた、あの日の興奮を……もう一度……

「叔父さん……俺っ」

第18話（後書き）

ついに次話……孝介が再び夢を追いかけるために立ち上がる

そのとき、孝介が向かった場所とは……

次の話から、また新たな展開にご期待ください

第19話

孝介は街路樹を見つめていた。歩道の端に立てられている、桜の木である。街路樹が点々と一定間隔の間で並べられて、この辺の道は春になると桜の並木道となって美しくなる

孝介は街路樹を見つめがらふと思い出していた

こんな話を聞いたことがある。ある写真家が一本の桜の木を見て、大きく感動をした

そしてその写真家はある夢を抱くようになった。桜の並木道を自分の手で作り上げるといふ、想像し難いけれども壮大な夢であったとそれは並木道とは言えなくなってしまう

また桜の苗木を何度も買う。だが彼は次第に気づく。ただの桜の苗木では、厳しい自然に立ち向かうことは出来ない、と。

そこで彼は一から桜の苗木を作ることにした。自然からもらった種から育てた

だが、それらは想像を絶する困難が待ち受けているばかりだったが彼は決して諦めることはなかった。周りの人間、あるいは家族までもが彼を馬鹿にした。気が狂っている、と罵った

だが彼は一つの信念を貫き通した

きつと自分の作った並木道が、何世代に渡り、それを見て幸福を与えることが出来る、と

癌に冒されても彼は諦めなかった。自分のもらった感動を、他の人へ与えるために

もしかしたら自分も、その一步を踏み出そうとしているのかもしれない。見えてくる先は闇。一寸の先も見えることのない、未来

だが孝介は思う

一寸の先が見える未来なんて、俺には必要ない

踵を返して、向かった先は病院。孝介がほんの二カ月前に事故を起こして入院した病院だ。彼はそこで一人の少年と出会った。類い希な音楽の才能を持ちつつも、重病を患っている少年に

孝介は病院内に入ると以前孝介が入院した病室へと向かう。彼とは病室がいっしょで、しかも隣のベッドだった。今思えば、不思議な巡り合わせだった

その病室に入ると、孝介は愕然とした。確かにこの病室だが、以前あの少年がいたベッドには今にも（失礼な言い方だが）お迎えが来そうな男性の老人が一人いるだけ

孝介は戻って病院のネームプレートを見る。だが、そこに高野奏の名前はなかった

まさか……と嫌な予感がした。背筋に寒気が走った

「あら？」

孝介が茫然としてネームプレートを見ていると、一人の女性の看護師が孝介の顔を覗き込みながら近づいてきた。孝介は彼女の顔を見ると、あっ、と思わず叫びそうになった

そこにいたのは、孝介が入院していたときに出会った若い看護師だった。そして……奏の姉だと思われる人物でもあった

彼女の名前は確か一度見た。名前は長谷である。名字が違うというのが気になったが、もしかしたら結婚しているのかもしれないと後々考えるようになった

かなり若いように見えるが、結婚してるようにも見えなくはなかった。指輪は仕事柄のために外しているのかもしれない

そう考えると何だか胸が痛むような気がして、孝介は入院中彼女とあまり関わりを持とうとしなかった

だがまたこうして出会えた

孝介は平然を装い、軽く会釈をして挨拶をした。すると長谷はにっこりと微笑んだ

「ああ。やっぱり。音無……さんですよ。お久しぶりです」

自分の名前を覚えていたことに孝介は胸が躍った。彼女の純粹で清楚な笑顔を見て、心が癒やされる。孝介は思わず笑顔になった

「どうも」

「足の方は大丈夫ですか？」

「ええ、もうすっかり」

「そうですか」

彼女はまた笑顔になった

「えっと今日は誰かのお見舞いとか……」

つまり何の用でここで突っ立っているのか、ということだろう。孝介は彼女の表情を冷静に分析した

彼女の笑顔は嘘のない明るい物だった

「えっと……あの、彼は……」

「彼？」

「はい。奏……くんのことで」

「奏？あ、奏に会いに来てくれたんですか？」

彼女はまたぱつと明るい笑顔でそう言った。同時に孝介はほつと安心した。どうやら孝介が考えていたこととは違つようだった

「はい」

「奏なら、病室が変わつたんです」

「あ、そうなんですか」

「はい。でも今は病室にもいないし……多分広場で散歩でもしてると思うんですけど」

「そうですか」

「良かったら案内しましょうか？」

孝介は少し考えた。奏に会いに来たのには理由がある。それをあまり彼女に知られたくない、という念があつたのだが、手っ取り早く奏を探せそうなので孝介はお願いすることにした

「あれからどうされてました？」

広場に向かう途中で孝介は長谷に聞いた。長谷は目を見張って孝介を見る。孝介は軽く笑った

「あ、奏くんのことです」

長谷はああ、と納得すると可笑しそうにクスツと笑った

「あまり変わりませんよ。いつも通りです」

「いつも通りとは？」

「ギターを持って、一日中弾いてます」

なるほど、と孝介は納得した

「病院内では弾くなって言ってるのに聞かなくて。“みんなが僕の音楽を必要としてる。だから僕は止めない”って言うんです。私頭来ちゃって、一度本気でギターを取り上げようとしたんですよ」

それは本当のことだ。よく音楽には不思議な力があるという。例えば植物にクラシックなどと言った音楽を聞かせると、成長を促進させると言いが、まさしくそれと同じだ

奏が奏でる音楽には不思議な力がある。簡単に言ってしまうと、元気を与えてくれるのだ

「あの……一つ聞いていいでしょうか」

孝介は長谷を見てそういう。長谷は首を傾げた

「あいつ……いえ、奏くんは何故この病院に入院してるんでしょうか」

その瞬時彼女の表情が曇った。孝介はまずいことを聞いてしまったと少し後悔した。しかし、孝介は今奏のことがもつと知りたかった。多少強引かもしれないが、聞き出してみるしかない。孝介は言葉を繋げた

「彼は自分で心臓に重い病を抱えている、と言っていました」

孝介がそれを口にする、と、長谷ははっとして顔を上げた。立ち止まって孝介の目を見つめる。それから俯き加減で呟くように言った

「あの子は……心疾患なんです」

「えっ？」

「慢性の虚血性心疾患といえます」

虚血性心疾患……孝介はふと学生の頃に読んだ医学本の内容を思い出した

確か……冠動脈に動脈硬化が起こって血液の循環を悪くしてしまう重篤の病気のことだ

朝鮮戦争時、アメリカでは1950年代頃、心臓病の患者の増加が問題となっていた

そこで朝鮮戦争で戦死した兵士を解剖したところ、ある医師が冠動

脈に動脈硬化が起こっているのを発見した

そこで心疾患と動脈硬化の関係を明らかにしたのである

だがこれはコレステロール値の異常値などが原因であり、男性は45歳以上、女性は55歳以上が危険因子とされている

恐らく10かそこらの歳の奏が患うような病気ではないと思えた

「奏の心臓は先天性の問題で弱いんです」

「弱い？」

「はい。そのためか、心臓の動脈の働き自体が元々弱くて……」

孝介は驚きが隠せなかった

「移植すれば助かるんですよね」

「移植をすれば98パーセントの確率で助かります。ですが……その肝心のドナーが見つからない状態なんです」

「過酷ですね……」

10歳そこらの少年には過酷過ぎる運命である。だが彼は全てを受け入れていた

そしてそれは全てを諦めているのだ

彼の表情を思い出すと、胸が締め付けられた

「奏くんとあなたのお父さんとお母さんは？」

そんな過酷な運命を背負う奏の父親と母親はどんな人なんだろう、と孝介は気になった。しかし長谷の表情はまた曇った

「あの子の父親と母親は……いません」

「え……」

「六年前に事故で……」

「あ……」

血の気が抜けていった。父親も母親もいない……

それを聞いた瞬時、孝介は奏のあの表情の本当の意味に気がついた
もしかしたら奏はすでに、生きることには失望しているのではないだろうか？

「すみません……」

「いえ。そんなことがあったもので、奏は家で引き取ることになったんです」

「……家で？」

「ええ。奏は甥っ子なんです」

「えっ？」

孝介は今度は大きく声をあげた。合点がいった

「そうでしたか……ってきり姉弟かと」

「よく言われるんです。あの子の母親が私の姉で……私たち三人姉妹なんです。私は一番末っ子なんですけど、あの子の母親は長女でして」

「そうでしたか。名字が違うという話にも合点がいきます。ってきり、ご結婚なされてるのかと」

「そんな。私、まだ二十三ですよ？」

彼女は何の躊躇いもなく歳を明かして可笑しそうに笑った

「あの子、叔母さんって呼ぶには若すぎるって。“姉ちゃん”って呼ぶんです。まあ、それのおかげで姉弟と間違われるんですが」

純粹な笑顔を見せて、孝介はほっとした。すると彼女はあっと開いた口を手で隠した

「そつえば自己紹介してなかったですね」

「え……あ、ああ、そうですね」

孝介が苦笑すると、彼女はにつこりと微笑んでゆっくりと頭を下げた

「私、ながやあき長谷亜紀といいます」

“ながたに”と読むと思っていたが、“ながや”だった

「俺は、音無孝介です」

「知ってます」

彼女は悪戯気に笑った。そんな悪戯気な笑顔に孝介は照れくさくな
って笑った

長谷亜紀は美人だった。芸能人でいうと誰似だろうと、想像してみる

広場に案内される。四方百メートル弱の広場には車椅子を押されな
がら楽しそうに会話をする人や、松葉杖を使って立っている人など
がいる

「ここはリハビリでもよく使われるんですよ」

「いい所ですね」

緑の木々に囲まれたこの広場はリラックスするのには素晴らしい環
境だと思った

そのベンチに、一人の少年がいるのを見つけた。ギターを手に持ち、
何かを弾いている。聞いたことあるメロディーだった

「あ、お仕事の方大丈夫ですか？」

案内をさせてしまったが、彼女にも他の仕事があるはずだった

「案内ありがとうございました」

「いいえ。えっと、私仕事の方に戻りますね」

「ええ。わざわざすみませんでした」

「いえ。何かありましたら、私に言ってください」

亜紀は軽く会釈をすると、少し足早で来た道を帰っていった

孝介は踵を返して、ゆっくりと彼に近づいていった。聞いたことのあるメロディー、いや聞き慣れているメロディーに孝介は胸が躍った

奏は目を閉じてゆっくりとした曲調でギターを奏でていた

「MR・LONELYだな」

孝介が口になると、奏は顔を上げた。そして孝介がいることに特別驚いたわけではなく、ただじっと孝介を見つめた

「玉置浩二の」

孝介が続けて言葉を続けると、奏はにっこりと微笑んだ

「好きなんだ」

「変わってるな」

「え？」

「結構古い曲だぞ」

「古くても、良い曲でしょ？」「……俺も好きな曲だ」

しばらく沈黙が続いた。本当に久しぶりに言葉を交わしたのに、ちつともそんな気がしないのは何故だろう。奏はじつと孝介を見つめた後、にっこりと微笑んでギターを差し出してきた

「聞かせて」

「え？」

「この曲。聞かせて」

「自分で弾けばいいだろう？」

「僕、歌詞全部知らないんだ。それとお兄ちゃんの声で聞いてみたい」

孝介はしばらく黙ったが、やがて小さく笑うと、今度はそのギターを受け取った

奏の隣に座って、ギターの弦を順に弾いていく。綺麗でクリーンな音色が孝介は好きだった……

孝介は優しくアルペジオでイントロから始めた

こんな僕でもやれることがある

頑張っ て ダメで 悩んで

汗流して 出来なくって

バカなやつだって笑われたって

涙こらえて…

W o o W o o W o o…

何にもないけど いつでも

野に咲く花のように

君が優しかったから

僕は元気にいるから

W o o… W o o… W o o…

どんなときでも

どんなことにでも

人の気持ちになって

この心が痛むなら

無駄なことだって言われたって

構わないから…

W o o … W o o …

何にもないけど

仲良く野に咲く花のように

君と暮らしていた頃を思っ

て元気にいるから…

むくわれないことが多いだろうけど

願いを込めて…

W o o … W o o …

何にもないけど

僕らは野に咲く花のように

風に吹かれていたって

いつでも どんな時でも

何にもないけど

君のために

野に咲く花のように

遠く離れていたって

笑って元気にいるから…

W o o … W o o … W o o …

W o o …

【MR・LONELY／玉置浩二】

第19話（後書き）

中川健司です

【MR・LONELY】を知っている方はいますでしょうか？

とってもいい曲で、僕自身何だかとても素直になれる一曲と感じています

ぜひみなさんも聞いてみてはいかがでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1435h/>

Sing With Songs

2010年10月11日20時02分発行